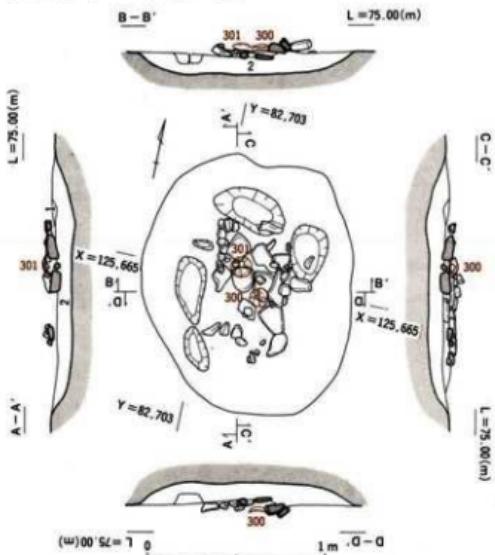


人骨は出土しなかったものの法量などからみて、他の石室墓同様に再葬墓としての位置づけが可能である。法量上は比較的大形であり、床面に用いる石材にもそれが反映している。出土した土器の型式から、6世紀末から7世紀初頭の年代が与えられる。石室墓全体を通して出土土器が少ないため、年代の明かな例は非常に貴重である。

7号石室墓 (ST1007) (第96図)



第96図 ST1007平面面図・遺物出土状況

#### 位置と現状

第12調査区中央部、AC-21グリッドに位置する。石室墓群の西南端にあたるとともに、SD1004に隣接する。包含層の掘り下げの際に疊床が検出され、その時点ですでに上部の構造は削平のため失われていた。

#### 墓壙の規模・形態

墓壙はやや歪んだ長楕円形を呈しており長軸1.45m、短軸1.19mの規模をもつ。浅い皿形の掘り込みで、現状での深さは0.11mである。埋土は

基盤層のものと類似しており、墓壙を掘り込む際の土を用いていることが想定される。

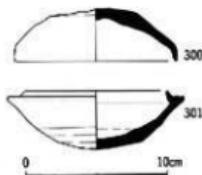
#### 石室の構築状況

7号墓もやはり壁体を失っているために、抜き取り穴からその概要をみると、平面プランは長方形で、内法は長軸で0.81m、短軸で0.49mを測る。N-17°-Wに主軸をもつが、頭位などは不明である。床面は一辺10~20cmの平たい疊を敷き並べ、鵝卵大の円疊を隙間に充填し、面を整えている。疊床床面のレベルは標高74.9mで、検出面とほぼ一致している。小口部の壁体は北側は一石で構成され、側壁は三石で構成されたとみられる。疊床床面中央部からは須恵器の蓋杯一組が出土した。その場で細かく砕けていたため完形に復元することができ、本来の副葬位置に近いものとみられる。

### 出土遺物（第97図）

須恵器の蓋杯はともに疊床上より出土したもので、本来のセット関係とみられるが色調に違いがあり焼成の条件は異なっていたようである。口径・器高の小型化が進んだもので、回転ヘラケズリは施されず回転ヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめる。蓋300では、成形後に反時計回りに土器を回転させて切り放した状況がみてとれる。杯身301では、ヘラ切りの痕跡を丁寧にナデ消してある。田辺氏のTK209型式に相当する。

法量などからみて再葬墓と考えることができる。副葬された須恵器は、田辺氏の編年のTK209型式に相当し、6世紀末から7世紀初頭の年代を充てることが可能である。このことは同様の構造をもつ石室墓の年代を考える上で、重要な意味をもつものである。



第97図 ST1007出土須恵器

### 8号石室墓（ST1008）（第98図）

#### 位置と現状

第12調査区中央部、AB・

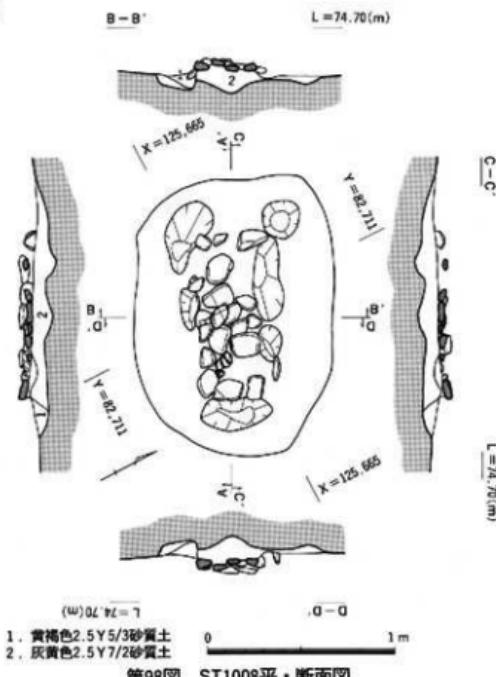
AC—22グリッドに位置する。石室墓群の南端である。包含層除去時に検出されたが、その時点ですでに削平のために上部の構造を失っており、疊床も現位置から多少動いている。

#### 墓壙の規模・形態

墓壙は長椭円形を呈しており長軸1.47m、短軸1.06mの規模をもつ。皿形の浅い掘り込みであり、現状での深さは0.11mである。墓壙内の埋土は基盤層の土と同様の特徴をもつ砂質土であるが、やや粒子が粗い。

#### 石室の構築状況

石室はその壁体をすべて失っているが、抜き取り穴によっておおよその概要を知ることが



第98図 ST1008平・断面図

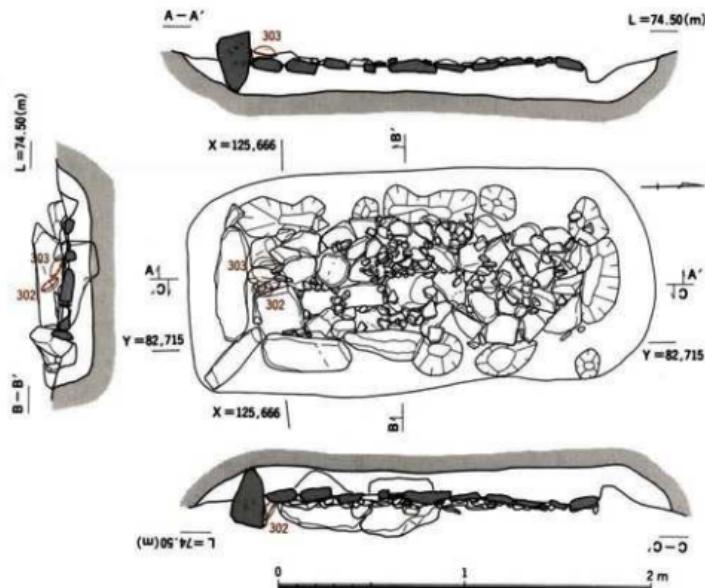
できる。石室の平面プランは長方形で、内法は長軸0.91m、短軸0.39mである。主軸はN-63°-Wで、頭位方向は不明である。床面は一辺10~15cmの平たい礫を敷き並べ、径5cmほどの小礫を隙間に充填している。礫床床面のレベルは標高74.5mで、検出面とほぼ一致している。副葬土器はなかった。

法量などの面からみて4~7号墓同様、再葬墓と考えられる。築造時期は副葬土器からおきえることができないが、再葬墓としての性格からみて、6号墓・7号墓と同様の6世紀末とみてよいだろう。

#### 9号石室墓 (ST1009) (第99図)

##### 位置と現状

第12調査区南東端、AC-23・24グリッドに位置する。これは第12調査区に展開する石室墓群の南東の一角となる。調査区の南東部分の地形は、北西部からの緩やかに傾斜しているおり、上面に若干の堆積がみられたが、天井石などの上部の構造はほとんどが失われていた。壁体を構成する石材は南側小口の1段目が一部残存するのみであった。その他の壁体につい

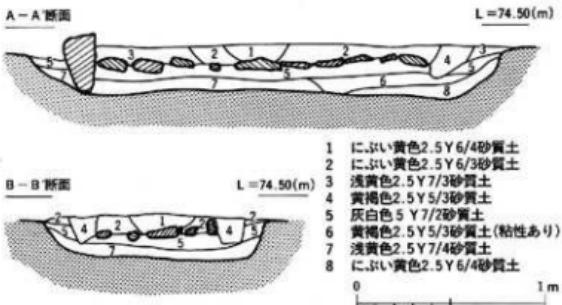


第99図 ST1009平・断面図・遺物出土状況

ては、石材が抜き取られた痕跡により、およよその位置関係を把握することができる。

#### 墓壙の規模・形態

長楕円形の平面形  
態をもち、長軸2.49  
m、短軸1.19mの規  
模を測る。現状での  
深さは0.24mで、床



第100図 ST1009土層図

面のレベルからみて掘り込みの面と検出面は一致していると考えられる。墓壙内の堆積土は4層に分けられ(第100図)、これらが墓壙形成時の工程に関連するものとみると、ST1004～1008と比較して丁寧なつくりをもつことになる。

#### 石室の構築状況

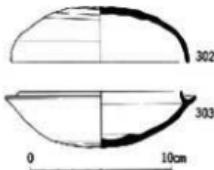
石材はいずれも砂岩の自然礫を用いており、壁体と礫床床面では形態・寸法がやや異なる。壁体では板状の石をたてており、その底面は床面よりも15cmほど深い。2段目以上の石材は小口積みとしていたと想定される。平面プランは基本的に長方形であるが、中央部でわずかに張る。南東角の短側壁と長側壁との間には、一石斜めにはいる石があり、平面プランのコーナー部分に丸みをもたせている。長側壁は両側とも4石で、北側小口部分は南側小口部と同様の構成とみられる。礫床は一辺15～30cmの平たい礫を敷き並べ、その隙間を鶏卵大の円礫を充填している。床面のレベルは標高74.35mであるが、北側が南側と比べて2～4cm高く、南側へ向けわずかに傾斜している。

#### 法量・主軸・頭位

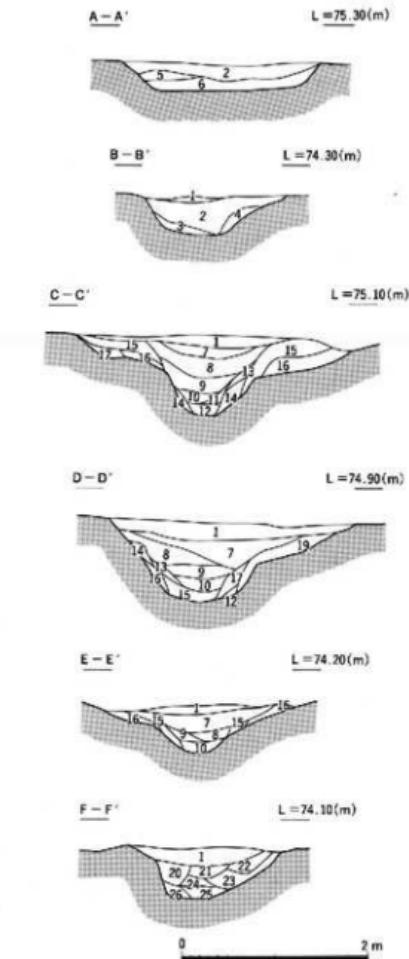
石室の内法は長軸で1.84m、短軸中央部で0.63m、小口部0.53mである。主軸はN-1°-Eでほぼ南北に向いているが、南側短側壁沿いに須恵器の蓋杯一組が逆転した状態で置かれていた。頭位は、床面が北側をわずかに高くつくっていることから北側と推定される。この場合、副葬された須恵器は足元に置かれていたことになる。

#### 出土遺物（第101図）

出土した須恵器の蓋杯はいずれも口径・器高とともに小形のもので、色調などから本来のセットとみられる。杯身303は内面のかえりが短く、上方へ反り、受け部の端部も上方へ折れる特徴を有するものである。2点ともに回転ヘラケズリの範囲が狭く、



第101図 ST1009出土須恵器



- 1 黄灰土2.5Y5/6砂質土
- 2 にい黄2.5Y6/3砂質土
- 3 淡黄土2.5Y7/3砂質土
- 4 灰質土2.5Y6/2砂質土
- 5 淡黄土2.5Y7/3砂質土
- 6 オリーブ褐色2.5Y5/4砂質土
- 7 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 8 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 9 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 10 にい黄2.5Y6/3砂質土
- 11 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 12 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 13 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 14 にい黄2.5Y6/3砂質土
- 15 淡黄色2.5Y7/4砂質土
- 16 にい黄2.5Y6/3砂質土
- 17 淡黄色2.5Y7/4砂質土
- 18 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
- 19 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
- 20 にい黄2.5Y6/4砂質土
- 21 黄褐色2.5Y5/3砂質土
- 22 淡黄色2.5Y7/4砂質土
- 23 にい黄2.5Y6/3砂質土
- 24 にい黄2.5Y7/3砂質土
- 25 にい黄2.5Y7/3砂質土
- 26 にい黄2.5Y6/4砂質土

第102図 SD1004堆積土層図(断面ポイントは、第77図に記入)

調整の手間を若干省いている。形態の特徴から田辺氏の須恵器編年TK209型式に相当し、6世紀末から7世紀初頭の年代が与えられる。

9号墓は、その構造において共通する小石室墓群の中でも、やや特殊な位置を占める。その規模が他の5基と比較して卓越しているという点からは、小石室墓群の中でも中核的な存在であることが窺える。また、他の5基が規模の面から再葬墓として位置づけられるのに対して、内法長1.84mは通常の埋葬に十分な法量である。したがって、その性格も再葬墓ではなく、単一の埋葬のためのものとみることができる。築造された年代は須恵器から6世紀末であり、古墳群全体の营造のピークに時期と重なる。

#### 4号溝 (SD1004) (第102図)

第12調査区・第13調査区をほぼ南北に直線的に継続する溝である。検出された延長は65.2mであるが、北端は削平や自然流路などで切られているため、本来はさらに北へ伸びていたことが想定される。溝底のレベルはA-A'断面では標高74.60m、F-F'断面では73.25mであり、確かに北から南へ傾いている。流れの方向は第12調査区部分で南から7°東へ向いているが、第13調査区部分

では $15^{\circ}$ と徐々に東側に振っている。幅は第12調査区で1.52~2.92m、第13調査区で1.90~2.65mとなっており、削平を受ける度合いの少ない箇所ほど幅広となっている。このことは深さにも現れており、0.30~0.91mの間で変化する。

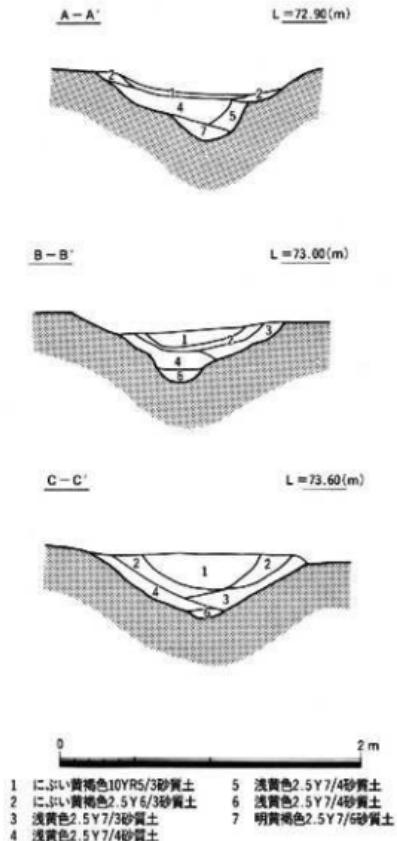
埋土は基本的に黄褐色形の砂質土であるが、色調的な差異は全般に乏しく、砂岩の風化繰りの混入の度合いが重要な分層の根柢となつた。堆積土の観察からC-C'、D-D'、E-E'、F-F'の各断面では1~3度の再掘削の行われている状況がみられた。

溝の肩部からチャート製のナイフ形石器が1点出土した他は、埋土中には土器が1点も年代を決める根柢にも乏しいが、

SD1002・1003、SD1005との位置関係や、古墳群の中心部を縦断していることも考慮にいれると、古墳時代後期に築造され埋没したとみてよいであろう。そうした場合その機能が問題となるが、SD1002・1003でみられたような大規模なものは少ないが、数回の再掘削の痕跡が認められることから、古墳群の展開だけではなく、生活面での役割も考えておくべきであろう。

#### 5号溝 (SD1005) (第103図)

第14調査区を長軸方向に縦断する溝である。検出された延長は27.2mで、幅はもっとも広い調査区南端で1.9mをはかる。深さは比較的残りの良い南側で40cm余りであるが、第13調査区のレベルなどからみると、開墾によって地形にかなり手が加えられており、本来の溝の規模はさらに大きなものであったことが想定される。溝底のレベルは標高で北から72.8m、72.2m、72.0mと北から南に向かっての流れが考えられる。流れの方向は調査区の北半ではS-40°-E、南半ではS-35°-E



第103図 SD1005堆積土層図(断面ポイントは、第76図に記入)

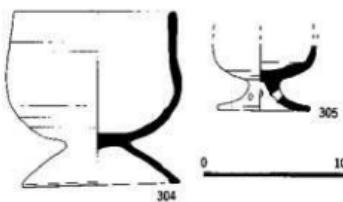
とやや南寄りに途中で角度を変えている。

堆積は基本的に砂質土で、その他の溝（SD1001～1004）と比較すると、しまりが悪く、小礫を多く含むなど、その質に違いがある。

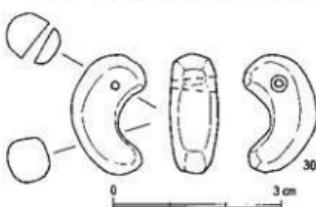
堆積土中には遺物は含まれていなかった。第14調査区は盛り土と擾乱が著しく、出土遺物は近世から近代のものが中心であり、5号溝の年代そのものも断定しがたいが、溝と古墳群の位置関係を勘案すると、古墳群築造の最も盛んであった6世紀後半から7世紀初頭とみることができる。

### 石室状石組

第12調査区と第13調査区との境界部分、7号墳・8号墳周濠の外縁に接する位置に砂岩の自然礫の集中する地点があり、若干の遺物がまとまって出土した。当初石室墓の可能性があるとみて10号墳の番号を与えていたが、調査が進むにつれて遺構ではないことが明かとなった。



第104図 第12調査区石室状遺構出土須恵器



第105図 第12調査区石室状遺構出土勾玉

### 須恵器（第104図）

2点の遺物が図化可能であったが、いずれも台付の椀となるもので、304はほぼ完形である。2点とも椀部分の下半が球形となる点に共通の要素が認められるが、脚部の形状・透かし穴に差異がみられる。304の脚部は直立した山縁を有し、上半にはきわめて弱い2条の沈線を巡らせる。こうした台付椀の形態は6世紀の後葉にもっとも多くみられる形態であり<sup>(7)</sup>、7号墳に帰属するとしても、年代的な矛盾はない。

### 勾玉（第105図）

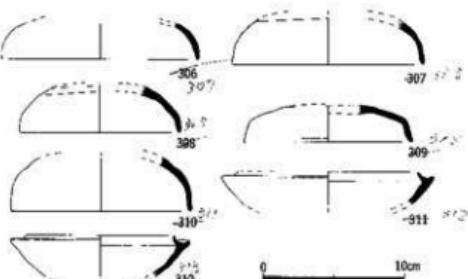
ひすい製でC字状を呈する、1号墳出土のもの（45）よりもやや小形で、素材の質もやや不良である。小形のためか背の湾曲は強く、頭部の角張りも強い。穿孔は主として図右側の側面より行われている。

### 包含層出土の遺物（第106～108図）

#### 須恵器（307～313）

出土した須恵器はいずれも細片となっており、図化した7点の他に頸部のみの断片がある。

第13調査区で出土した蓋307・308は7号墳出土の高杯の蓋と共通の胎土・色調をもつ。第12調査区で出土した2点の杯は、いずれも立ち上がりが内傾して短いものである。これらの須恵器は図を掲載しなかった最も含めて田辺氏編年のTK43型式からTK209型式に位置づけられ、調査区内の遺構と年代がほぼ一致する。



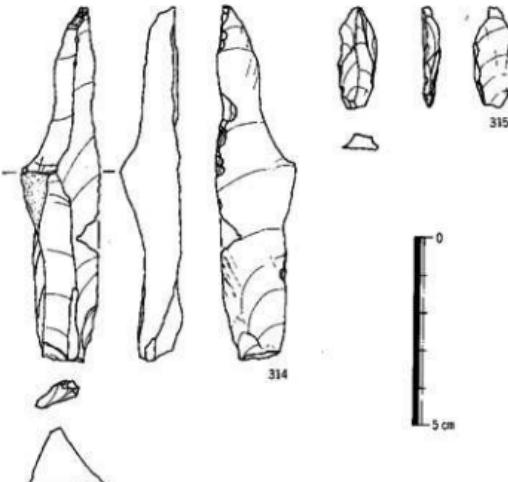
第106図 第12～第14調査区出土須恵器

#### 旧石器 (314・315)

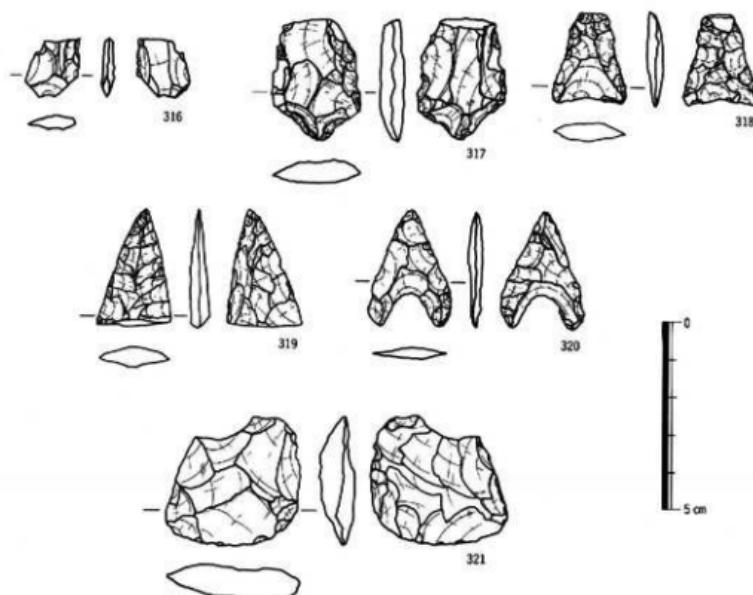
314はサヌカイト製ナイフ形石器である。素材は縦長剝片で、先端の一部に加工がみられる。長さ94.85mm、幅22.30mm、重さ22.53gを測る。315はチャート製の小形のナイフ形石器である。縦長剝片を素材としている。長さ27.80mm、幅10.30mm、重さ1.31g。基部を中心に細かい調整が行われている。

#### 石器 (316～321)

316～321はいずれもサヌカイト製の石器である。317～320は石鏃で、316は木製品と考えられる。317は凸基式、318・320は凹基式である。全体の形状・基部の形状・茎部の有無などに大きな差がある。320は基部のえぐりが大きく、表面の風化が他の石器より進行しており、縄文時代までさかのほる可能性がある。321はスクレイパーで下端部に使用痕跡がみられる。320を除くと弥生時代中～後期に属するとみられる。第12～第14調査区において弥生土器は若干出土しているものの、縄文土器に



第107図 第12～第14調査区出土旧石器



第108図 第12～第14調査区出土石器

ついては出土がなく、遺構の広がりは近接地には想定し難い。

### 注

- (1) 以下、石器の分類・部分名称などは、平井勝『弥生時代の石器』(考古学ライブラリー64 ニュース・サイエンス社 1991)による。
- (2) 「陶邑古窯址群」平安学園考古クラブ 1996  
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1982
- (3) 西弘海「土器様式の成立とその背景」「土器様式の成立とその背景」真風社 1987  
『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
- (4) 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究 一中・四国編一』1986
- (5) 湯浅利彦「『五角形鏡』小考—西日本における縄文時代晩期を中心とした打製石鏡の素描—」『徳島県埋蔵文化財センター紀要 真朱』第1号 1992
- (6) 山田邦和「装飾付須恵器総覧—装飾付須恵器の基礎的研究3—」『古代学研究所研究紀要』第2輯 1992
- (7) 藤川智之「須恵器輪・台付椀の検討」『徳島県埋蔵文化財センター紀要 真朱』第2号 1994

### 3 まとめ

#### 1 旧石器の問題点

柿谷遺跡で出土した旧石器は点に及び、異なる地点から異なった様相の石器が出土している点が注目される。その地点と主な石器は以下の通りである。

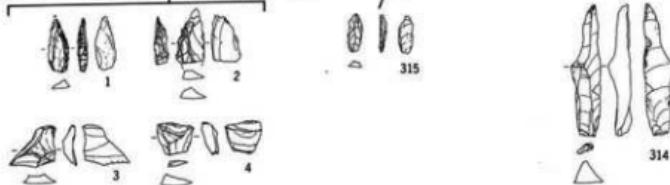
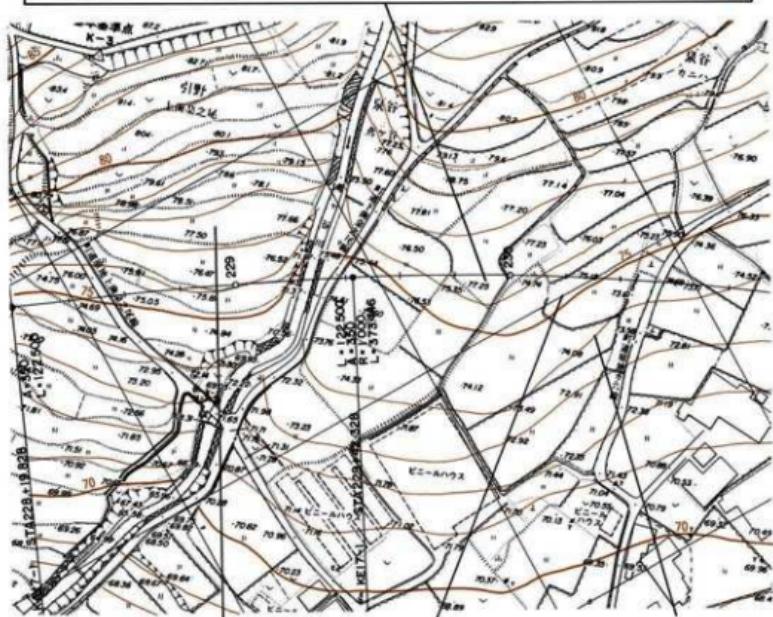
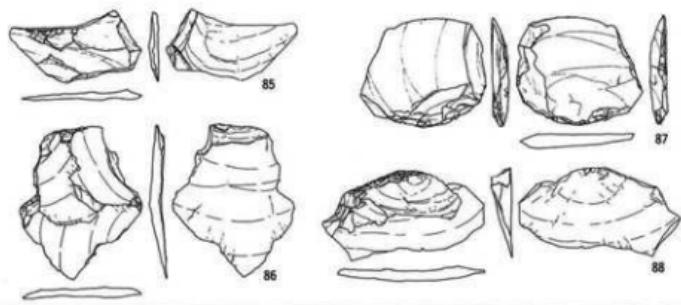
- ①第1～第3調査区のチャート製（1）、サヌカイト製ナイフ形石器（2）、サヌカイト製剝片（3・4）
- ②第6調査区のサヌカイト製の剝片・スクレイバー（85～88）
- ③第12調査区のチャート製ナイフ形石器（315）
- ④第13調査区のサヌカイト製ナイフ形石器（314）

第6調査区で出土した4点の石器は、1号墳横穴式石室の排水溝周辺の比較的狭い範囲に集中していた。サヌカイト製の剝片及びスクレイバーであり、他の3地点にはみられない大形のもので占められている。87には新しい剝離がみられ、後世に転用のための調整を行っている可能性もあるが、調整技法は4点に共通するものであり旧石器と認識しておく。徳島県内ではこうした大形の剝片を中心とする石器組成は現段階では知られておらず、香川県国分台遺跡群<sup>(1)</sup>出土の資料などとの対比から縄文時代草創期にさかのほる可能性が指摘できる。

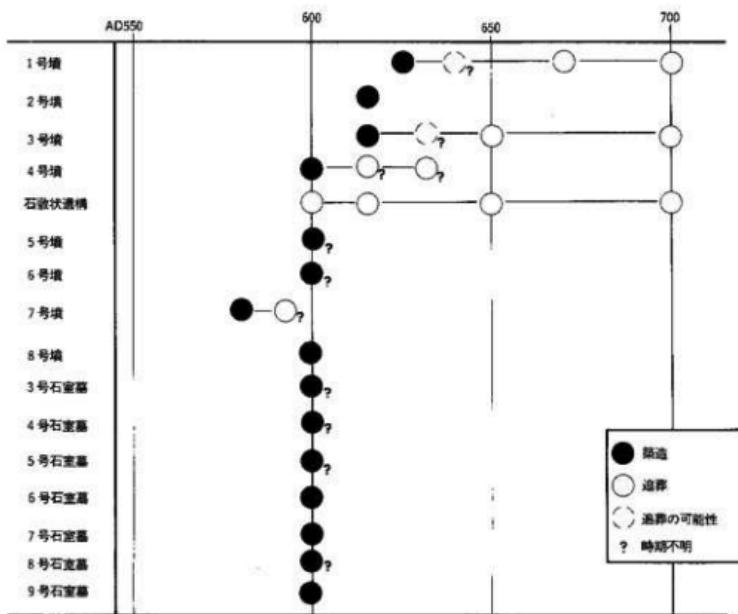
第1調査区・第12調査区ではチャート製のナイフ形石器が1点ずつ出土した。形態・法量が異なるばかりではなく、素材とする剝片も違っており、別の技法に立脚するものである。石材として用いられたチャートは地質区分で言う「秩父帯」に含まれており、遺跡の所在する和泉帯・隣接する三波川帯には含まれておらず、秩父帯を流れる勝浦・那賀・桑野の各河川流域よりもたらされたものである。吉野川北岸・和泉帯において、チャートを素材とする石器群は板野郡土成町金蔵～上井遺跡においても出土している<sup>(2)</sup>。2遺跡の不完全な資料のみでは多くを語る段階ではない。サヌカイトを素材とする石器との比較検討や石材獲得のシステムについては、今後の資料の増加によって深められるべきテーマであろう。

第13調査区で出土したナイフ形石器は、縱長剝片を素材とするものである。背面には上下より交互に剝離が行われており、下面には打面調整の痕跡がみられる。瀬戸内技法によるものではなく石刃と共に技法によるものである。

ナイフ形石器は3地点より出土しているが、石材・形態などに変化がみられる。それぞれの位置関係もそれぞれ数十m離れていることをも考慮すれば、年代も若干異なる別々の石器群を構成しているものとみるべきであろう。



第109図 旧石器出土地点と旧地形の復元



第110図 各遺構の造営過程

## 2 柿谷遺跡における古墳群の築造

### 群集墳形成の過程

柿谷遺跡で検出された横穴式石室は8基で、もっとも古い型式の土器が出土したのは第13調査区の7号墳である。その後出土した須恵器と横穴式石室の型式的な変化をもとに各遺構の年代を模式図に示した(第110図)。造営は6世紀後葉に始まり(7号墳)、西暦600年頃にもっとも多くなる遺構(3・5・6・8号墳、3~9号石室墓)の築造が行われるとともに、7号墳では6世紀の末までに追葬が行われていた可能性があり、追葬の最初の段階が古墳群造営のピークの時期と重なっている点が興味深い。7世紀の前葉段階では、3基の古墳(1~3号墳)が築造されるが、1号墳が土器の型式で一段階遅れる。1号墳・3号墳・4号墳において比較的短い間隔での追葬があり、これらは7世紀前半のうちに行われたとみることができる。以後追葬活動は弱まり、3号墳で西暦650年頃と800年頃にそれぞれ一度、1号墳で7世紀後葉と800年頃にそれぞれ一度行われ、以後の古墳群をめぐる状況は不明である。石敷状造構の上面および下面より出土した土器の年代が、3号墳・4号墳の造営過程と一致していることは石敷状造構が古墳破壊によって成立したことを示す。

こうした造営過程で注目されるのは、6世紀後葉の7号墳が古墳群内の東端に近い位置にあり、直後の段階に墳丘を寄せるようにして8号墳が築かれる一群（仮に東群とする）と、4号墳→2号墳・3号墳→1号墳と北からほぼ南へ順に築造する一群（仮に西群とする）がみられる点である。この二つの系譜を一連の古墳の造営活動とみなせば、東群の8号墳と西群の3号墳は同年代であるから、造営活動の中心部は左回りに移動していくこととなる。土器の出土がなく横穴式石室の形態も不明部分の多い5号墳・6号墳を、西暦600年前後に位置づけた理由はここにもある。むしろ3号墳に近い年代まで下げて考える余地もある。

以上の検討によると、6世紀後葉から西暦800年頃までの古墳群の一連の造営活動の流れが途切れなく100年を越えて続いていることができる。遺跡の範囲が調査区外に広がっていることは当然推定される事柄ではあるが、一連の流れが完結しているという点では柿谷遺跡における古墳群のうちの一支群の状況は捉えることができたと考えられる。徳島県内においては、徳島市から名西郡石井町にかけての気延山山塊や天河別神社古墳群を中心とする鳴門市大麻町周辺で前方後円墳が数基みられ、首長の系譜を見いだすことが可能であり、古墳時代を通じた造墓活動も行われている。しかし、これらの地域ではある程度の面積をもつ大規模な調査は行われておらず、その群構成の解明は充分に行われていないのが現状である。こうした状況をふまえ、6世紀後半以降の限られた年代ではあるが、完結した流れを確認することができたことは大いに意義がある。

#### 横穴式石室の形態・構造

7号墳の横穴式石室は玄室の中央部が膨らむ胴張りの形態をとっており、その平面プランからは美馬郡・麻植郡を中心に分布する「忌部山型」石室の範疇に含まれる。上部構造が不明である点は惜しまれるが、県内の横穴式石室の平面プランを通観するに忌部山型の一つのバリエーションとみてよいであろう。7号墳より後出の横穴式石室の内、4号墳・3号墳・1号墳については胴張りの傾向が薄れ、狭長な長方形へと形態が変化する。また、7世紀以降には複室構造の導入が行われているが、その形態は形骸化が進んだものである。

こうした形態の変化については須恵器の編年的な問題とも併せて述べたことがある<sup>(3)</sup>ので、詳しく述べない。次項では、やや大形の7号墳・4号墳・3号墳・1号墳が築造された時期に並行して、こうした横穴式石室築造の原理に則らない古墳の存在について注意しておきたい。

#### 小形の横穴式石室の並存と群構成

2号墳・5号墳・8号墳は無袖の横穴式石室であり、規模的にもやや小形である。6号墳は遺存部分がきわめて少なく、側壁は若干胴張り気味であるが判断は下しがたい。従来から

知られている徳島県の後期古墳においては、一つの古墳群を構成する横穴式石室の形態は齊一性が強いことが一つの特徴としてあげられる。群形成の過程で横穴式石室の系統が複数にまたがっているという点は、柿谷遺跡の一つの特異性を示すとともに、古墳をとりまく社会環境をも反映しているものであろう。

#### 小豎穴式石室の構造とその位置づけ

柿谷遺跡における小豎穴式石室は7基を数える(3~9号石室墓)。うち4~9号石室墓は第12調査区において検出された。3号石室墓についても第11調査区の南寄りに位置しており、同一グループとみることも不可能ではない。しかし、構造や古墳との位置関係が異なっており、同一の評価は下せない。したがって、分布状況からは2つのエリアが設定できる。3号石室墓の場合には5号墳・6号墳の墳丘裾に接するか、墳丘内にもぐることの想定される微妙な位置である。一方、4~9号石室墓は南北10m・東西12mの狭い範囲に集中してみられる。この範囲に隣接する古墳がみられないことから、石室墓のみによる墓域を形成したといふことができる。

7基の石室墓は構造と規模により、主に2つのグループに分かれる。

3号石室墓は直方体に近い石材の平坦面を内側に向けて積み上げてゆくものである。規模的にも長軸2.3m、短軸1.1mと大形のものである。この構造と規模をもつ石室は今のところ県下では知られていないが、愛媛県伊予郡砥部町長田2号墳の周濠内に築かれた第2号石室は、構造や古墳との位置関係において比較検討の対象となるものである<sup>(4)</sup>。伸展葬が可能な規模であるが、5号墳・6号墳の墳丘との関係が調査で明らかにできなかつたため、その性格付けも充分に行うことはできない。

4~9号石室墓はいずれも板石を立てて基底石とするもので、2段目以上は失われているもの的小口積みとなる構造が想定されるものである。平たい円礫を敷き詰めた礫床をもつ。礫床に用いる石材の大小や、礫床を平坦にするための円礫の充填の有無にある点にやや相違がある。これら6基の中で、9号石室墓については長軸1.84m、短軸0.63mと規模が大きく、墓壙の形状などが異なっており、このグループ内で中心的な存在といえる。大形の9号石室墓を除く5基については、伸展葬が不可能であり再葬墓としての性格を与えうる。

副葬品は6号・7号・9号の各石室墓に須恵器の蓋杯がみられ、武具・農工具・装飾品は認められなかった。

#### 副葬物の問題

副葬品の特徴として、その組み合わせの中に武具・馬具・農工具などの鉄製品がきわめて少ない点があげられる。

2号墳…鉄鎌2、轡

3号墳…刀子1

4号墳…鉄鎌7

以上その他に、7号墳の周濠内からは馬具とみられる破片が出土しているが、断片的であり出土状態も安定していないため、その評価を十分にすることはできない。

同時期の古墳群について、群単位で行われた調査は現段階では非常に少ない状態である。麻植郡山川町忌部山古墳群<sup>(5)</sup>、板野郡板野町蓮華谷(II)古墳群<sup>(6)</sup>、上板町山崎古墳群<sup>(7)</sup>・山田古墳群A<sup>(8)</sup>・菖蒲谷西山B遺跡<sup>(9)</sup>においては、馬具を副葬する古墳が複数に及ぶか、一古墳のみにとどまっているが、馬具を副葬する古墳が複数に及ぶか、一古墳のみにとどまっているが、馬具を副葬する古墳が複数に及ぶか、

このように、馬具や武具の保有率は柿谷遺跡よりかなり高いといえる。

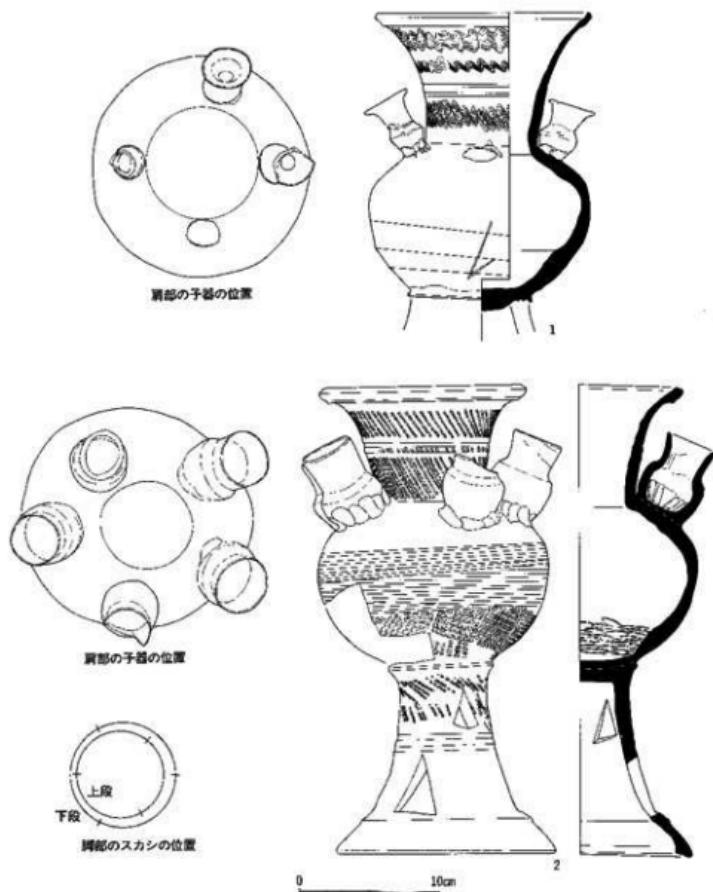
7号墳で出土した須恵器の子持器台は県下で初の出土である。子持器台は山田邦利氏の形式分類でI-2類にあたる<sup>(10)</sup>。この形式は近隣の地域では和歌山・岡山・愛媛に集中しているが、細部の形態においていずれも若干の異動がある。小形で脚部中央部が細くくびれ端部へ向けて開きの少ない形態は類例が乏しく、鳥取県中西尾6号墳、福井県西二つ屋古墳などでみられるに過ぎない。その他の装飾付須恵器全体を見渡しても、台付子持壺が2例知られているに過ぎない。いずれも徳島市国府町西矢野出土で、うち1点は山花古墳出土とされているが、この古墳についての詳細は明らかにされていない。みかん畠などの開墾とともに出土したと伝えられるものである。今まで写真のみでしか紹介されていなかったこともあり<sup>(11)</sup>、今回報告書の刊行に際して実測図の作成を行い、ここに掲載した(第111図)。

2点はいずれも台付壺を観器として、壺部の肩に子器を配するという形態である。山田氏の分類による装飾付壺III類に相当する。Iは脚部の形状が不明であり、III類での細別はできなかつたが、III-2類になるものとみられる。観器は偏球形の体部から直線的に緩やかに開

番号	部 位	器 高	口 径	体部最大径	頸 部 径	口 頸 部 高
1	観 器	21.2	15.05	15.8	8.05	9.4
	子 器 ①	4.15	3.25	2.75	1.9	1.75
	子 器 ②	—	—	—	—	—
	子 器 ③	(2.55)	—	2.45	1.75	—
	子 器 ④	4.2	3.4	2.65	1.8	2.2
2	観 器	19.8	13.9	16.5	6.6	7.7
	子 器 ①	5.8	3.5	4.2	3.05	2.4
	子 器 ②	(4.9)	—	4.3	2.9	(1.0)
	子 器 ③	5.4	3.7	4.6	3.35	2.6
	子 器 ④	5.75	3.8	4.8	3.3	2.5
	子 器 ⑤	5.0	3.6	4.1	3.1	2.3

第3表 徳島市国府町出土の装飾付須恵器の子持壺の部分計測値

く口頸部を有する。口頸部には沈線と櫛描波状文による文様帶が展開する。口縁端部は幅広の尖端がめぐり、この部分の器壁は非常に薄く仕上げられている。子器は壺部

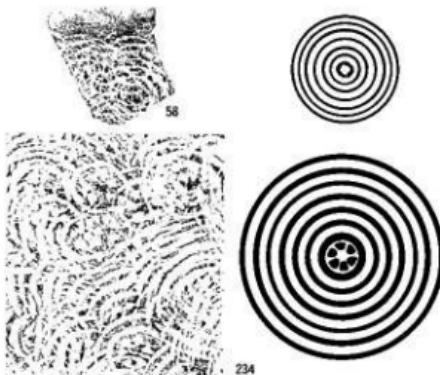


第111図 徳島市国府町出土の装飾付須恵器（1：西矢野出土 2：山花古墳）

の肩に4個体が載るもので、その形態は親器に似て口縁部が外上方へ反る。子器の底部は親器とはつながっていない。親器の体部下半には回転ヘラケズリが施され、「V」字形のヘラ記号がみられる。現存高21.2cmである。2は一部を欠するものの、ほぼ全形が分かるものでⅢ—2類に相当する。器高33.2cm、脚端径15.1cmを測る。親器の体部はほぼ円形で、口縁部はまっすぐ立ち上がり端部付近で大きく開く。口縁端部にはやや厚みのある突帯がめぐる。下半は外面格子タタキ、内面円形当て具による成形が行われ、体部中半は回転カキメ調整が施される。脚部は直線的に開き段を経て、端部に至る。弱い2条の沈線で区画され、それぞれ

3箇所の三角形透かしを千鳥配列で穿つ。口頸部及び脚部上段には櫛描点文がめぐる。子器は口頸部が直立するタイプのもので、内面には親器への接合時のヘラ状工具によるナデの痕跡が明瞭に残る。親器の壺口縁端部や脚部の形態からみると、2点ともに田辺氏の編年におけるTK10～MT85に並行する可能性が高い。

これらの3点の装飾付須恵器の各形式の分布域は伊予・吉備を中心とした瀬戸内海沿岸に広がっており、これらの分布域の一角を占めるものであることは確かである。3点をもって断定は困難であるが、現在のところ徳島県内では6世紀末以降の新しい段階の出土ではなく、愛媛・高知では7世紀に至る段階でも装飾付須恵器を多用する点からみると、西四国域とは様相が異なる様相を見する。



第112図 車輪文の二態 (左:拓本 右:復元模式図) ( $S=1/3$ )

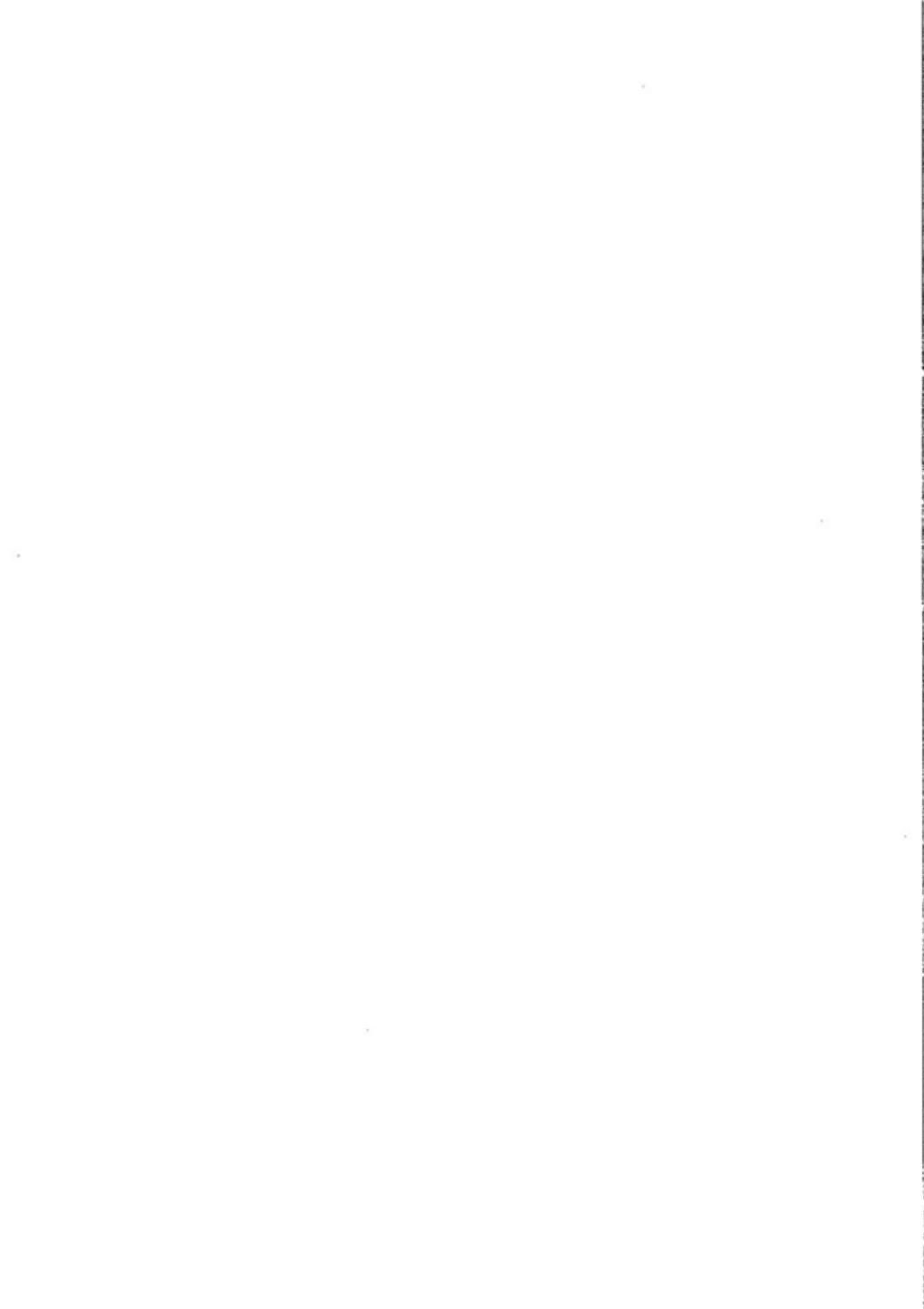
車輪文叩き目については、横山浩一氏が1981年当時の資料の集成とその起源の問題についてまとめられている<sup>[12]</sup>。各種の形態の車輪文を取り上げるとともに、その起源が木材の亀裂を想形とした放射状文様であることを論証された。柳谷遺跡出土の58については、刻みが20箇所もみられ、亀形となる亀裂からは大きくかけ離れているといえる。また、横山氏の論考を受けた西口寿生氏も車輪文が須恵器工人の問題にまで及ぶという見方を示している。横山氏の集成以後もわずかづつ資料が増加しているものの<sup>[13]</sup>、系統的な検討は行われていない。研究者の関心が薄いためかとも思われるが、資料の着実な蓄積が望まれるところである。

須恵器の中で子持器台と並んで注目されるのは、車輪文の当て具痕をもつ臺である。車輪文は同心円文で、具の中央部に放射状の刻み目をいれるものである。SD1002・1003で1個体(58)とSK1002で1個体(234)出土した。これら2個体の車輪文の当て具は形態が異なっている(第112図)。58は口縁部付近の一部分の破片であるためにその全形は不明であるが、径5.8cm以上の当て具の機能面に

7条以上の同心円を刻み、中心部には径1.0cmの範囲に20箇所の細かい刻みをいれる。同心円は幅2mm以下と非常に細い。234は欠損している口頸部を除きほぼ関係に復元された。体部最大径付近においてもっとも当て具痕がよく残っている。径11.0cmの当て具の機能面に7条の同心円を刻む。中心部には径1.5cmの範囲内に6箇所の刻みをいれる。同心円自体も幅3～4mmと広く、車輪文部分の幅も58と比較して長さ・幅とも大きく、別原体によるものであることは明かである。

注

- (1) 「旧石器時代」『香川県史』1 原始・古代 香川県 1988
- (2) 「金蔵～上井遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1993
- (3) 藤川智之「須恵器からみた徳島県後期古墳の一側面」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要』真朱 徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (4) 「長田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書II』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981
- (5) 「古墳時代の徳島市」徳島市教育委員会 1981
- (6) 「忌部山古墳群」徳島県博物館 1983
- (7) 「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1994) 所収
- (8) 「山崎古墳群」『掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館、1988
- (9) 本報告書所収
- (10) 本報告書所収
- (11) 山田邦和「装飾付須恵器総覧－装飾付須恵器の基礎的研究3－」『古代学研究所研究紀要』第2輯 1992年
- (12) 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号、九州大学九州文化史研究施設 1981
- (13) 『陶邑II』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980



遺物観察表

第4表 第1~第3調査区出土石器調査表

(単位mm)

番号	坪田	岡坂	形式	石 材	全 長	幅	厚 み	重 量(g)
5	8	4	四面磨平	サスカイト	22.00	15.30	4.50	0.81

第5表 第1~第3調査区出土土器観察表

番号	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼 成	回転台	備考
6	6区外 内縁	杵	口径 10.5 先端 13.0 立上 0.55	内側する旋い立ち上がり をもつ杯の縁添形。立 上がり部に内側の削痕は弱 い。	既存部は西脇ナガ調 整。	(外)青灰色 (内)暗青灰色	密、厚0.5mm木 炭の砂粒わず かに含む	良好	不明	
7	6区外 外縁	碗	口径 11.45 脚部 8.85 安都 13.75 立上 0.6	高い立ち上がりを有する 杯部に短い縁足がつく。 杯部は半球形で、立ち上 がり部は立筋間に内側し、 縁部は半丸入り気味にお さまる。脚部は縦添の内 側で八の字状に大きく開 き底部は上下に斜張し、 いすれも角になっておさま る。	西脇部外縁は四面へラ イ後、脚部結合時に四面 ナガ。その他は西脇ナガ 整理。	(外)青灰色 (内)暗青灰色	密、径1cm木 炭の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
8	6区外 内縁	平底 1)縫合部 6.1 縫合部 5.0	原部より最もやかな角度で 開く平底の内縁部。縫 部は丸くおさまる。半位 外面に被合痕が切跡に顯 示できる。	既存部は西脇ナガ調 整。	(外)灰白色 (内)暗青色	密、厚2mm木 炭の砂粒わず かに含む	良好	不明		
9	6区外 内縁	広口壺	11.15 13.4	明確な縁足をもたない傾 杯から徐々に外側へ突く 口縁部につながる。肩部 は外側に入り込む肥厚し、 丸くおさまる。縁部から 縫合部にかけて、縫合痕 の接合部を強調に残す。	体部内面は同心円文タグ キ口。その他の既存部位 は西脇ナガ整理。	暗青灰色	密、厚2mm木 炭の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
10	6区外 立脚	平底 口縫部	12.65	縫合部より緩やかに外側す る口縫部。縫合部付近で外 面に記痕がみられ、半位 縫合部をもつ。内縁はテナ による凹凸(耳)立つ。縫合 内縁に被合痕あり。	既存部は西脇ナガ調 整。	(外)暗灰色 (内)灰色	密、厚0.5mm木 炭の砂粒わず かに含む	良好	不明	

第6表 SM1001石室内出土土器観察表

番号	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼 成	回転台	備考
11	足底	コ錠	11.8	縫合や丸みをもつ杯。 口縫部に内縫い状で、内 縫が厚膜する。	既存部外縁は四面へラ イ後ナガ整理。その他の既 存部は西脇ナガ整理。	灰白色	粗良	良好	不明	
12	杯蓋	11.15	丸みを帯びた瓶形をもつ 杯蓋。大井部の丸みのま まご縫合部にいたり、縫合 部は丸くおさまる。	大井部外縁は四面へラ イ後、四面へラクゼリ。 その他の既存部は西脇ナ ガ整理。	(外)暗青灰色 (内)青灰色	粗2~3mmの 砂粒を含み、 厚0.5mm木 炭の砂粒わず かに含む	良好	時計回り		
13	杯蓋	12.0	4.65							
14	杯蓋	12.0	4.65							

器皿 番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
13 18		杯蓋	口径 12.7	丸みを帯びた錐形を有する杯蓋の口縁部。縁やかなカーブのまま丸く端部がおさまる。	天井部外表面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰褐色・灰白色 (内)灰白色	密、径0.5mm 溝の砂粒少し 青む	やや軟質 反時計回り		
14 15 11		杯蓋	口径 12.0 高さ 3.8	大井部がやや平坦な形態で、口縁部に向かって緩やかにかづする。縁部ではわざずに外反し、丸くおさまる。	天井部外表面は回転ヘラ削り後、無調整。その他は回転ナデ。	青灰色・明緑 灰色	精良	やや軟質 時計回り		
15 18 11		杯蓋	口径 11.5	縁やかなカーブから直立する口縁部にいたる。縁部は内側が肥厚し、丸くおさまる。ナデによる凹凸が強著である。	底存部は回転ナデ調整。 口縁部内面には特に強いナデ。	灰色	精良	良好	不明	
16 18 11		杯蓋	口径 10.85	丸みを帯びた天井部をもつとえられたる杯蓋片。全体に縦筋は薄いつくりとなっている。ナデによる凹凸が強く、端部は丸くおさまる。	底存部は回転ナデ調整。	灰色	密、径0.5mm 溝の砂粒わずかに含む	良好	不明	
17 18 11		杯蓋	口径 10.8 高さ 3.6	11径に比して都度の高い錐形。内面に成形時の凹凸をよく残す。	天井部外表面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗赤灰色	密、径2mm 溝の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
18 18 11		杯蓋	口径 11.2 高さ 3.8	扁平な器形で、天井部に宝珠形の丸みがついており突出している。かえりは内側し、11径以下へ下がっていない。	天井部外表面は西脇ヘラ削り、その他の天井部ナデ調整。 天井部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	(外)灰白色・ 暗赤色 (内)灰色	精良	良好	時計回り	
19 18 11		杯蓋	口径 11.2 高さ 2.65	全体の器形・宝珠もつまみに僅かな杯蓋。かえりは想ぐ内傾する。かえり・口縁といずれも端部を丸くおさめる。	天井部外表面は回転ヘラ削り、その他の天井部ナデ調整。	灰白色	密、径2mm 溝の砂粒少し 含む	やや軟質 時計回り		
20 18 11		杯蓋	口径 9.9 高さ 2.25	扁平な器形で、天井部にやや偏なつまみを付す。	天井部外表面は回転ヘラ削り、その他の天井部ナデ調整。	灰白色	精良	やや軟質 時計回り		
21 18 11		杯蓋	口径 9.2 高さ 2.8	扁平な器形で、天井部に宝珠形のつまみを付す。内縁部のかえりはなく、また回曲も弱い。	天井部外表面は回転ヘラ削り、その他の天井部ナデ調整。	灰白色	精良	良好	時計回り	
22 18 11		杯蓋		極めて扁平な器形に扁平な笠状五つのつまみを付す。非常に緩やかなカーブをもち、口縁部付近で下方へ折れ曲がる。器壁には成形時のナデの痕跡を明顯に残す。	天井部外表面の1/2は回転ヘラ削り、その他の生の部位は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質 時計回り		
23 18 11		杯	口径 9.1 高さ 3.35 受部 11.1 立上 0.45	やや平たい盤をもつ小形の杯。立ち上がりは直線的に内傾し始へ。内面の器底はやや強い。	底部外表面は回転ヘラ削り、その他の天井部ナデ調整。 底部内面は回転ナデ調整後、一定方向ナデ。	暗赤灰色	密、径0.5mm 溝の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	

番号 標本 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
24 18 11	杯	口径 9.3 器高 3.3 受部 11.2 立上 0.3	器高・口徑とも小形の器形。立ち上がりは瓶く内傾しており、内面の屈曲は弱い。	底部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ調整。底部内面は回転ナダ後一定方向ナダ。ヘタ切りの痕跡よく残す。	暗青灰色	密、厚1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り ヘタ配 等		
25 18	杯	口径 10.9 器高 3.55 受部 12.05 立上 0.15	器高に比して低い立ち上がりを有する杯。立ち上がりは内傾し、底部は尖り気味におさまる。内面の屈曲は弱く、粘土の接合痕明顯。	底部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ調整。	青灰色・灰白色	密、厚0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り 9		
26 18	杯	口径 8.85 器高 3.4 受部 10.75 立上 0.4	口径・器高とともに小形の器身。立ち上がりは内傾し、尖り気味におさまる。内面にはナダが施されているため、屈曲はない。	底部外側は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。その他の部分は回転ナダで、底部内面は回転ナダ後一定方向ナダ。	青灰色	密、厚0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り ヘタ配 等?		
27 28 11	杯	口径 9.15 器高 3.3 受部 11.25 立上 0.4	口径・器高とも小形の器身。立ち上がりは内傾し、上方へ反り尖り気味におさまる。内面の屈曲はやや強い。	底部外側はヘタオヨシの底堅を残し、底部ヘラ削りは施されてない。その他の部分は回転ナダ調整で、底部内面は回転ナダ後一定方向ナダ。	暗青灰色	密、厚0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り		
29 18 11	第2種 床上面	口径 9.3 受部 11.3 立上 0.4	口径・器高とともに小形の器身。立ち上がりは内傾し、丸くおさまる。内面の屈曲は弱い。	底部外側は回転ヘラ削り。その他は回転ナダ調整。	暗青灰色	密、厚0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明		
30 18 11	杯	口径 9.7 器高 3.5	平底に外方へまっすぐ立ち上がる口縁がつく。口縁部は丸くおさめている。	底部外側は四輪ヘラ切り後、ナダ調整。その他は回転ナダ調整。底部内面は四輪ナダ後一定方向ナダ。	暗青灰色	密、厚1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り		
31 18 11	杯	口径 8.9 器高 3.65	丸みをもつ器形の杯で、口縁部ははざかに内反している。口縁部の形態が2~4mmと薄く仕上げられている。	底部外側は回転ヘラ削り後ナダ調整。その他は回転ナダ調整。	(外) 暗青色 (内) 灰白色	稍良	やや軟質	不明		
32 18	杯	口径 9.2 器高 3.95	やや丸い底からそのまま立ち上がって1/2器にいたる器形。体部中央にごくわずかな粗筋がある。	底部外側はヘタ切り後ナダ調整。その他は回転ナダ調整。	灰白色	開片	軟質	時計回り		

番号	位置	器種	法身 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
33 18 11	石室内	杯	口径 11.1 高さ 3.1	縁やかな丸みをもつ杯。 口端部はむずかに内凹気 味で、底部はむくおさま る。	底部外縁は回転ヘラ指 り、その他の部分ナガ彫 刻。底部と脚部の接合部 で立ち上がり、丸くおおは さる。脚部は実在があり て、脚部附近で大きく開 き下方へ折れ曲がり、脚 部はやや尖り氣味であ る。	青灰色	密、径2mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	焼付けり	
34 18 11	石室内 所3	杯	口径 12.45 高さ 6.75 脚部 9.1	非常に複雑な模様の杯底に 八の字形に開く網目を付 す。外縁は縁やかなカーブ で立ち上がり、丸くおおは さる。脚部は実在があり て、脚部附近で大きく開 き下方へ折れ曲がり、脚 部はやや尖り氣味であ る。	杯底部外縁は回転ヘラ指 り。その他は回転ナガ彫 刻。脚部と脚部の接合部 で立ち上がり、丸くおおは さる。脚部は実在があり て、脚部附近で大きく開 き下方へ折れ曲がり、脚 部はやや尖り氣味であ る。	灰白色	やや粗、径1 mm未溝の砂粒 や多く含む	やや軟質	焼付け回 り	
35 18 11	無蓋高 杯	口径 13.85	無蓋高杯の杯底で、本 来は僅かな模様であった が墨みが著しい。	底部外縁は回転ヘラ指 り、その他の部分ナガ彫 刻。	青灰色	密、径1mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	焼付けり		
36 18 11	平底	口径 5.8 深度 11.5 最大 14.65 脚部 3.8	底平な掌形の手瓶で、上 面はやや尖り氣味である。体 部は火照は上位1/3にあ り、下の張りはやや強い。	体部上部外縁は墨色カキ メ色、円柱ナガ彫刻。そ の他の接合部は墨色ナ ガ彫刻。体部内部中央部 に施した墨色光沢の施 跡。	(外)灰白色・ 墨色 (内)灰白色	密、径0.5mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	不明		
37 18	普通鉢 瓶	口径 25.0 脚部 21.1	明暗な加彩をもつ表面か ら外へ上方へわざかに外張 して伸びる線脚。1層 脚部外縁は墨厚している が、表面の洗いである。上 面に網目を作り出し、 施跡は外縁とともに肥厚し おさまる。	体部内面は同心円文タク キの可能性がある。その 他の接合部は墨色ナ ガ彫刻。	灰白色	密、径0.5mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明		
38 18	土師器 杯	口径 12.25	浅い模様をもち、底やか なカーブで立ち上がり、 やや尖り氣味におさま る。	表面は内外面とも墨が 著しいが、内面は平滑に 施され、幅1mmの縞文 が約2mm間隔に施されて いる。	(外)墨色・白 色 (内)墨色褐色	精良	軟質			
39 18 11	土師器 杯	口径 12.6	縁やかな丸の器形を もつし縁脚片。縁脚には 内外縁のナダにより、圓 い沈痕がある。	底部外縁は静止ヘラ指 り。その他の部分ナガ彫刻。 体部内面は幅2.5mmの縞 文。体部をもつ放射状收縮。	褐色	精良	やや軟質			
40 18	陶生土 器	脚部 5.95	表面をやや上げ窓にし、 F-ナサ底とし、外上方 へまっすぐ立ち上がる脚 部を有する。	摩耗により觀察不可。	(外)にい地 色 (内)にい青 色	密、径1mm未 溝の石英、長 石などをやや 多く含む	軟質			
41 18	陶生土 器 底部	脚部 7.0	底部をやや上げ窓にする 陶生土器の底盤。底盤は 外上方へまっすぐ立ち上 がる。	底部外縁はスピオサエ。 その他の部位は調整不 規則。	にい黄褐色	密、径2mm未 溝の石英、長 石多く含む	やや軟質			

第7表 SM1001出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)	材質	技法
44	17.40	19.50	4.80	6.15	4.04	銅地銀	中実

第8表 SM1001出土勾玉計測表

(単位mm)

番号	材質	A	B	C	D	E	F	重量(g)
43	石	26.10	14.90	8.80	9.70	2.20	3.20	5.35

第9表 SM1001出土平玉計測表

(単位mm)

番号	材質	径	高さ	上面径	下面径	上孔径	下孔径	重量(g)
44	木	16.50	11.90	13.30	13.00	4.20	4.20	3.11

第10表 SM1001周濠出土土器観察表

番号 部品 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
45 19 11	周濠	杯盤	口径 19.3 高 3.9	丸みを帯びた器形をもつ 杯盤。緩やかなカーブで 口縁部にいたり、底部が 外反し、底面は丸くおさ まる。	天井部外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分ナガ削 り。	墨、径1mm の砂粒をわざかに含む	良好	時計回り		
96 19	周濠	杯盤	口径 11.75 高 3.25	偏平で丸みを帯びた器形 の杯盤。緩やかなカーブで 口縁部にいたり、底部が 内凹がわずかに押出ししな くおさまる。	天井部外縁は四輪ヘラ削 り、その他の部分ナガ削 り。	墨、径2~5 mmの砂粒をわ ざかに含み、 0.5mm未満の 砂粒多く含む	良好	反時計回 り		

第11表 SD1002・3出土土器観察表

番号 部品 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
47 26	上蓋	杯蓋	口径 14.05	やや高めな器形をもつ杯 蓋と底盤。口縁部はわ ざかに外反し、底盤はや や突り気味におさまる。	天井部外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分ナガ削 り。	(外) 墨 (内) 墨 色	墨、径0.5mm の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
48 26		杯蓋	口径 14.25	緩やかなカーブをもつ杯 蓋と底盤。口縁部はわ ざかに外反し、底盤にお さまる。	天井部外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分ナガ削 り。	(外) 墨 (内) 墨 色	墨、径1mm の砂粒多く 含む	良好	不明	
49 26	1区	杯蓋	口径 11.45	偏平な器形をもつとされ られる杯蓋の口縁部。下 方へ折れ曲がった口縁 部は、やや突り気味にお さまる。	天井部外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分ナガ削 り。	灰白色、灰 色	綿	良好	不明	
50 26	上蓋	杯	口径 9.3 受部 11.9 立脚 0.65	小形の手舟の受け部以上の 破片。立ち上がりは内 傾後、上方へ反り、底部 は尖っている。内部の折 曲は弱い。	接合部は凹凸ナギ。 底盤	灰色	墨、径0.5mm の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	

番号	位置	器種	法量(cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
51 26	上部	杯	口径 12.9 底部 15.9 寸寸 0.65	最高に比してやや口部が 大きく膨らまる杯口部 削り。立ち上がりは直線 的に内傾する。端部にや やけた火痕におさまる。	残存部位は回転ナデ調 型。	暗青灰色	精良	良好	不明	
32 26		高杯		脚柱と柄部との接合部のみの遺存。下方で脚部 に向かっての状況に開く と考えられる。半手に弱 い沈縫が1条通り、うち 1条は削除が不可など に弱い。下方に1条の比 縫が通る。スリット状の 透しが上下2段。2方向 に穿たれる。	外周部外縁は回転ヘラ削 り。その他の残存部位は 回転ナデ調型。	青灰赤色、透青 灰、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	周計回り		
53 26	1区	高杯		下方へ八の字形に大く 開く脚部で、柄部・脚部 部はいずれも欠損してい る。裏面は2段に2段 方に穿つ。半手に1条 の沈縫をもたらし、さら に下方には退化した沈縫 の名残をもつ。	残存部位は回転ナデ調 型。	灰色	透、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	不明	
54 26 16	3区	壺	最大 8.5 底部 3.8	やや偏平な球形の体部を もつ瓶で、頸くびれが 透すかずには脚部は欠損 している。体部上半1／ 3に沿った縫を1条通ら す。体部最大腹部分円孔 は欠損している。	体部下半1／3は唇口へ テ割り、その他の残存部 位は回転ナデ調型。脚部 内面に、体部と1箇所接 合時の紋様の痕跡。	(外)青灰赤色・ 暗青灰色 (内)青青灰色	透、径1mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好		
55 26 16	褐色粘 質土	壺	最大 10.6 底部 3.3	丸い壺部に弱い脚部をも ち、1箇所の大穴が欠損 している。壺部は下半が 球形で上半は直腹的であ る。円孔を半手上方に穿 ち、脚部に2状の弱い沈 縫をもたらす。脚部にも 弱い沈縫が1条ある。	壺部下半は回転ヘラ削 り、その他の回転ナデ調 型。	青灰赤色	透、径0.5mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好	反時計回 り	
56 26 16	9区	平壺	最大 18.6	圓弧な体部をもち、口盤 部を欠損している平壺 形。体部裏表はやや上 位にもら、裏の覆りは強 い。壺部は半底状を呈し てている。	体部外縁は停止ヘラ削 り、体部の脚部外縁は回 転ヘラ切り後、ナデ調型。 その他の残存部位は回転 ナデ調型。	深白色・灰色	透、径1mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	
57 26	1区	口徑	16.6 底部 14.7	外側へまっすぐ伸びる 口の口唇部。脚部外縁が 肥厚し、壺部はわずかに 上方へ拡張し、丸くおさ まる。	残存部位は回転ナデ調 型。	灰色	透0.5mm未 溝の砂粒わずか に含む	良好	不明	
58 26 16	9区	壺	口径 23.5 底部 20.3	壺底からまっすぐ外縁へ 伸びる口の口唇部。口 底部外縁に鋸角的では ないものの断面三角形の 突唇をもたらし、壺部はそ のまま丸くおさまる。	体部外縁は平行タキキ 後、回転カキメ調型。体 部内面は同心円タキキ。 その他の残存部位は回転 ナデ調型。	褐灰・深褐 色	透、径2mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	不明	

番号 擇図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調査の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
59 26 16		甕	口径 21.9 底部 18.15	頂部より外上方へまっすぐ開く夢の内縫合。口縫合部は底部外縫合に幅2cmの幅広の突起を送らし、内面には斜カットによる内縫合は斜カットによる内縫合が送る。底部はやや内側に張りがあり、器壁は0.8cmである。	体部外縫合はタテ方向の平行タタキ後、周辺カキメ調整。体部内縫合は同心円タタキ。その他の内縫合は斜カットによる内縫合である。その他の内縫合は斜カットによる内縫合。	青灰色	黒、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
60 26 16	9区	甕	口径 33.9 底部 19.5	頂部近では直立し、側面へ漸々に開く便の口縫合片。内縫合部は外縫合に肥厚し端縫をつくる。さらに上方向へまみ上げられ、丸くおきる。底部外縫合は外縫合に幅2.5cmのハケ状工具で操作とする現象があられる。	体部外縫合は平行タタキ後、周辺カキメ調整。体部内縫合は同心円タタキ。その他の内縫合は斜カットによる内縫合。	(外)灰色 (内)オリーブ褐色	黒、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
61 26 16	9区	甕	口径 25.85 底部 20.6	底からまっすぐ外縫合へ伸びる夢の内縫合片。口縫合部外縫合に幅2.2cmの幅広の突起を送らせる。	体部外縫合は平行タタキ、内縫合は同心円タタキ。その他の内縫合は斜カットによる内縫合。	暗青灰色	黒、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
62 26 16	1区	甕	口径 29.5 底部 25.6	頂部近では直立し、側面へ外反する便の口縫合片。内縫合部外縫合に幅2.3cmの幅広の突起を送らし、端縫は内面につまみ上げられて丸くおきまる。	操作部位は回転ナブ開閉装置。	灰色	黒、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
63 26	3区	弥生土器 底部		ドーナツ底状の上げ底を有する弥生土器の底部分。体部は上方へ伸びるものと考えられる。	底減が著しいため、觀察不可。	明黄褐色	黒、径2mmの砂粒・灰石を多く含む	軟質		
64 26 16	弥生土器 底部	7.8		底部をベタ底とし、直線的に立ち上がる体部を有する。底部附近での器壁の厚みは10mmを超える。	体部外縫合はタテナギ、内縫合はタテ方向のヘラ削り。体部と底部の結合部分はユビオサギが散見される。	(外)に深い褐色 (内)に深い褐色	黒、径4mm未満の砂粒多く含むほか、磁晶片岩を含む	やや軟質		

第12表 SD1002・1003出土石器調査表

(単位:mm)

番号	擇図	図版	形式	石材	全長	幅	厚み	重量 (g)
65	27	16	円基	サスカイト	22.30	14.00	3.00	1.11
66	27	16	平基無基	サスカイト	24.85	15.70	3.80	1.19
67	27	16	凹基無基	サスカイト	27.60	16.45	2.55	1.05

第13表 SD1002・1003出土ガラス玉計測表

(単位:mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ (g)	色調
79	6.275	4.00	2.2	0.21	サファイアブルー

(単位mm)

番号	径	厚み	孔 径	重さ (g)	色 調
71	6.0	4.0	1.4	0.23	シアンブルー
72	3.875	4.0	2.5	0.22	ブルシアンブルー
73	5.4	3.2	1.4	0.11	コバルトブルー
74	5.35	3.85	2.3	0.16	ブラックティング
75	4.2	2.65	1.4	0.06	ペニスグリーン

第14表 第4～第9調査区出土土器観察表

番号 標識 回数	位置	形態	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
76 29 16	3区包 合層	杯蓋	口径 12.35 高 3.35	やや偏平で丸みを帯びる 器形をもつ杯蓋片。口縁 は約5mmで器底が厚く、 端部は丸く削り込まれる。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他の残存部位は 回転ナガ調整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り	
77 29	5区包 合層	杯蓋	口径 14.4	偏平な器形の杯蓋口縁部 片。かえりはなく、断面 三角形の突起状をなし、 内側に強い筋模がある。 口縁端部は外側に端面を もち、わずかに下方へ延 張する。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他のは回転ナガ調 整。	(外)灰色 (内)暗灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り	
78 29	5区包 合層	杯	口径 10.75 受部 13.1 立上 0.35	短い立ち上がりをもつ杯 の口縁部片。立ち上がり は内側わずかに上方へ 反る。端部はやや尖り気 味におきまり、内面の筋 模はやや強い。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他のは回転ナガ調 整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り	
79 29 16	5区包 合層	杯	口径 12.2 受部 14.95 立上 0.25	短い立ち上がりをもつ口 縁部受け部分の破片。 受け部にけつきによる筋 模をもつ。端部は尖り氣 味で、内面の筋模は弱い。	残存部位は回転ナガ。	暗青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
80 29 16	8区包 合層	杯	口径 10.5 受部 13.2 立上 0.7	口径にしてやや大きめ で厚手の受け部をもつ。 立ち上がりは内側し、内 面の筋模はやや強い。	残存部位は回転ナガ調 整。	暗青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
81 29 16	6区包 合層	杯	口径 13.7 高 3.85 受部 16.0 立上 0.6	器高に比してやや大型の 口縁をもち、短い立ち上 りがありを有する杯身片。立 上上がりは内側し、やや 尖り気味におきまる。「I」 字端部及び受け部の筋模 は比較的シャープなつく りである。	底部外面は回転ヘラ削 り。その他の残存部位は 回転ナガ調整。	(外)灰色・黒 (内)灰色・暗 灰色	やや粗、径2 mm未満の砂粒 非常に多く含 む	良好	反時計回 り	
82 29	5区包 合層	杯	口径 12.65 受部 14.75 立上 0.65	水平に近い角度の受け部 をもち、内側する立ち上 りがありはやや尖り気味にお きまる。	残存部位は回転ナガ調 整。	灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	不明	

番号 標図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
83 29 15	B区包 含層	高杯脚 部	11.8	端部に向かって八の字状に大きく開く高脚の脚部 片。中半には側面底線を 2本有りとして捉え、 その上下にスリット状の 溝をして2方向に穿つ。脚 部底付近は水平となっ て、下部へ弧度して、や や尖り気味に曲ざまる。	残存部位は四枚ナガ調 整。底部内面には脚部 への接合時の絞りの痕 跡。	(外)青灰色 (内)青灰色・ 暗青灰色	灰、径2mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好	不明	
84 29	先生土 系 層 部	口径 部	19.5 18.8	脚部で鋭く屈曲し、口部 溝部に向けて腰やかに広 がる。腹部は丸くおさま る。	摩耗により観察不可。	褐色	灰、径4mm未 溝の黄灰・ 青灰が常に多く 含む	軟質		

第15表 第4～第9調査区出土石器調査表

(単位mm)

番号 標図 図版	形 式	材	全長	幅	厚み	重量 (g)		
89	31	17	五角形	サヌカイト	17.90	13.90	2.25	0.66
90	31	17	凹基無茎	サヌカイト	11.40	11.20	2.30	0.24
91	31	17	凹基無茎	サヌカイト	16.35	15.45	3.80	0.56
92	31	17	凹基無茎	サヌカイト	18.15	15.60	5.05	0.78
93	31	17	凹基無茎	サヌカイト	27.15	17.50	3.85	1.78
94	31	17	凹基無茎	サヌカイト	27.90	17.60	4.30	2.18
95	31	17	凹基無茎	サヌカイト	22.75	23.00	4.85	2.71
96	31	17	凸基無茎?	サヌカイト	36.00	17.00	5.70	3.80
97	31	17	凸基無茎	サヌカイト	39.00	13.50	3.65	2.26

第16表 SM1002出土土器観察表

番号 標図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
99 36	上部脚 高脚			円柱状の脚部に脚部がつ く。11脚及び脚端部は欠 けている。脚部は下平 1/3まで大きく八の字状 に開くものと考えられ る。	脚部外端は細かいハラ (26条/17mm)による調 整後、脚部との接合部は 丁寧なナガ調整。脚部内 面はハラ工兵による調 整。	灰白色	灰、径0.5mm未 溝の砂粒少し 含む	やや軟質 不明		
100 36 29	土加脂 高脚			円柱状の脚部に外端がつ く。11脚及び脚端部は欠 けている。脚部は下平 1/3まで大きく八の字状 に開くものとと考えられ る。	脚部を形成した後に脚部 を接合し、さらに脚部周 辺より粘土を充填し、 輪郭整形を行っている。 脚部は外端が脱ナガ調 整、内面はハラナガ調 整。外端は遺存状況が悪く観 察不可。	灰白色	やや粗、赤色 粒及び径1mm 未溝の砂粒や 多く含む	軟質	不明	
101 36 29	杯蓋	口径	13.7	丸みを帯びる唇形で、腰 やかなアーブルで口縁にい たる。脚部は丸くおさま る。	残存部位は四枚ナガ。	灰白色	灰、径1mm未 溝の砂粒や 多く含む	良好	不明	

番号 種類 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
102		平瓶	無高	仙鶴形の蓋部に幅く外反する口縁部をもつ。腹部の天井部は蓋やかなカブトとなっている。口縁部は中心部よりややはざれた開口に付けられ、外上方へ伸びる。	蓋部下半1/3と上半2/3は別の骨壺单位によも回転カキメ。その他の四輪ナゲ調整。底部を円錐光底でいったん盛いだ後、口縁部を削し、接合部を丁寧にナギしている。	(外)暗オリーブ・灰色・灰白色 (内)赤灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
36			15.5							
29			高さ 16.7							
			腹部 3.8							

第17表 SM1002出土鐵鑄計測表

(単位cm)

番号	出土古墳	出土位置	型式	全長	鐵身部長	鐵身部幅	鐵身部厚	莖部長	莖部幅	莖部厚
103	SM1002		平造方頭式	—	8.65	3.3	0.4	—	0.5	0.4
104	SM1002		平造方頭式		6.6	2.8	0.35		0.65	0.35

第18表 SM1003石室内出土土器観察表

番号 種類 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
114 47		杯蓋	口径 14.6 高さ 4.43	全体に丸みを帯びた卵形で横やかに口縁部にいたる。口縁は内凹せず、そのままのカーブで丸くおさまる。	天井部外縁は凹輪へラ削り、その他は回転ナゲ調整。	青灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒多く含む	良好	時計回り	
115 47	墳丘北東・隅 裏付	杯蓋	口径 13.2	丸みを帯びた卵形の杯蓋で、全体に器壁が薄い。 口縁部はやや尖り味にござまる。	残存部位は回転ナゲ。	灰白色	密、径9.3mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
116 47 26		杯蓋	口径 9.83 高さ 3.85	肩に弱い畠山のある杯蓋。全体に薄いつくりになってしまっており、2mmとなる箇所もある。 口縁部はやや外反感味で、端部はやや突り気味におさまる。	天井部外縁は凹輪へラ削り、その他は回転ナゲ調整。	灰色	密、径2mm未満の砂粒多く含む	良好	時計回り	
117 47 26		杯	口径 9.0 高さ 3.45	平坦な窪面から腹やかなカーブのまま口縁にいたる。周辺は丸くおさまる。	底部外縁は凹輪へラ削り、ナゲ調整。その他は回転ナゲ調整。	明青灰色	密、径1~3mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
118 47 26		杯蓋	口径 7.15 高さ 2.7 受部 8.9 立上 0.2	綱平な表面で、大井形にやや偏平な尖端形のつまみを付す。 かえりは成立し、前面に明顯な屈曲がある。	天井部外縁は凹輪へラ削り、その他は回転ナゲ調整。	(外)黒色・灰白色 (内)暗灰色	やや粗、3mm未満の砂粒常に多く含む	良好	時計回り	
119 47 26		杯蓋	口径 8.7 高さ 3.25 受部 10.45 立上 0.25	綱平な基形で、天井部にやや偏平な尖端形のつまみを付す。	天井部外縁は凹輪へラ削り、その他は回転ナゲ調整。	暗青灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	

番号	種類	位置	器種	法長(cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
120 47 26	口 箕	P 2	杯盤	11径 11.5 高さ 2.85	全体の器形・つまみ共に 複雑な杯盤。かえりは短 く断面三角形で、内傾し ている。	天井部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。	灰白色・暗灰色 青、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り	接着物 あり	
121 47 26	横丘比 東ほか	杯盤		11径 16.2	非常に斜平な器形で、か えりをもたず断面なつま みが割れ落ちた痕跡を もつ。	天井部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。	明黄色 青、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り		
122 47	医道器 1大房 臺中	杯	口徑 9.9 高さ 3.4		丸みを帯びた器形から腰 やかなカーブで口縁部に いたる。口縁はごくわず かに外反し、底部は仄く おきめる。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。	明黄色 青、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り		
123 47 26	無蓋高 杯		口徑 14.0 高さ 9.7 脚端 9.15	透い器形の外唇に腰部を 付する無蓋高杯。腰やかな カーブのまま口縁にいた る。腰部は丸くおきめる。	杯底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。	灰白色・深褐色 やや粗、径1 mm未満の砂粒 や多く含む	良質	時計回り			
124 47 26	無蓋高 杯	口徑 13.9 高さ 7.9 脚端 9.65		受け部をもたない器形の 外唇に八の字状に大きく 開く脚部を持つ。外部 は斜平で腰やかなカーブ のまま口縁に至り、脚部 は丸くおきめる。脚部は 規則的倒状で下半で大き く開く。脚部の上部に膨張 している。	杯底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。脚部は腰やかなカーブ で開閉が施されている。	(外)青褐色 (内)暗青色 青灰色	青、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り		
125 47 26	無蓋高 杯	口徑 14.85 高さ 8.5		透い器形の外唇に腰部を 付する無蓋高杯で、外唇の 腰やかなカ ーブのまま口縁にいた り、腰部は丸くおきめる。 脚部は比較的短く、八の 字状で大きく開くもので あろう。	杯底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナダ削 り。	青灰色 やや粗、径4 mmの砂粒を含 み、径1mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り			
126 47 26	無蓋高 杯	口徑 15.1 高さ 10.15 脚端 11.6		透い器形の外唇に腰部を 付する。外唇は腰やかなカ ーブで1字型にいたり、 脚部はそのまま丸くおき まる。脚部は円柱状で1 条の弱い化粧を施して脚部 に向けて大きく、八の字 状に開く。脚部は上下に 絞り、細部には回轉が 通る。	杯底部外側は回転ヘラ削 り。その他の回転ナダ削 り。	灰白色	青、径0.5mm未 満の砂粒や 多く含む	良好	反対計回 り		
127 47 26	医道器 周縁	平瓶	最大 18.9	気球形の体部をもつ平瓶 片。上部は継やかなドー ム状、下部は平底状を呈 し、最大径部は中半よ りや上位にある。	体部外側下部は回転ヘラ 削り、上面は回転カキメ。 その他の回転ナダ削 り。周縁の内部に内縫には粘 土の内充填物がある。	青灰色 青、径2mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り			
128 47	2次窓	平瓶	最大 12.35 脚端 3.5	倒錐形の体部に短く外反 する口縁部で、体部は は凸部・底部共に丸み を帯びた形態。口縁部は 腰部が欠損しているが、 腰部に強いナダによる崩 壊がある。	体部下部1/3に回転ヘ ラ削り、その他の回転ナ ダ削り。	(外)灰白色・ 灰色 (内)灰色	青、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り		

番号 等級 図版	位置	樹種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
129 47 26	地	口桂	9.9 9.9 高さ 13.0 最大 8.85 深さ 2.45	管状形の背面に大きく上方に開いた口部がある。底部は半球形を呈している。最大部分には細め下方への穿孔があり、粘土塊が差し込まれている。口端部は底部との接着箇所が特に細くくびれ上半で輪郭状に大きく開く。底部半円と口部底と底部との接目に各1上の凹部がある。	底部下半外面は静止ヘラ削り、その他は回転ナフ調整。	(外)暗青灰 白・青灰色。 (内)暗青灰色	やや粗、僅2mm表面の砂粒 やや多く含む	丸肝	不明	
130 47 26	閉塞部	梗	13.3 13.3 強度 13.4	体部と半以上が遺存する。半球形の体部に、口端部がさき口強度がつく。口端部はわずかに外反するもののほぼ直立し、底部円山において大きく肥厚し、表面をもつ。表面(外)の肩部の円滑浮文は、全周で4箇所につくものと考えられる。	体部外面は腹核子タキ後、回転カキメ調整。体部内面は同心円文タキタキ。口端部内外は回転ナフ調整。	明青灰色	底、径1mm 溝の砂粒ごく わずかに含む	丸肝	回転計測 り	
131 47	土器部 杯	口徑 16.3 高さ 6.6	平底形のやや深い碟形をもつ土器部。底やかみカーブで立上がり、口縁にいたる。口縁部はわずかに内崩し、内面に肥厚をもちごく深い沈跡を残らせる。底盤は丸く見える。	全体にヨコナデを施した後、底面外周は静止ヘラ削りで、口縁部付近では横方向のタミオキ。底部内面は放射線浮文で、見込み部分に2箇の施設文を施す。周文の直径は約1.5mmである。	底色	粗良	やや軟質			
132 47 26	土器部 高杯	浅い皿形の器部に円柱状の脚部をもつ高杯	脚部のため、断片的にユビサエのみが複数可能である。	黄色	やや粗、底1mm 表面の砂粒少しあむ。	軟質				

第19表 SM1003出土ガラス玉計測表 (単位mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ	色調
133	3.0	4.1	1.6	0.14	バーブリッジブルー
134	3.95	3.1	0.9	0.06	ブルシアンブルー
135	3.875	2.65	1.3	0.05	バーブリッジブルー
136	5.2	4.1	1.1	0.15	ブックウイング
137	4.325	3.5	1.7	0.08	バーブリッジブルー
138	4.275	2.63	1.6	0.06	バーブリッジブルー
139	4.1	2.9	1.4	0.07	バーブリッジブルー
140	5.325	3.8	1.7	0.16	バーブリッジブルー
141	4.65	2.9	1.1	0.12	ビーコクブルー
142	4.05	3.9	1.6	0.09	ミッドナイトブルー
143	5.875	2.8	2.1	0.14	バーブリッジブルー
144	3.625	2.2	1.6	0.01	ブックウイング

番号	径	厚み	孔径	重さ (g)	色調
145	5.2	4.5	1.0	0.2	パープリッシュブルー
146	3.8	2.1	1.1	0.01	ブラックウイング
147	3.375	2.45	1.2	0.01	ブラックウイング
148	5.075	3.8	1.9	0.14	ラッディイトブルー
149	6.05	3.4	1.8	0.17	ブルシアンブルー
150	3.35	1.6	1.0	0.01	ブルシアンブルー
151	3.725	2.1	1.0	0.04	ブルシアンブルー
152	3.775	2.0	1.0	0.01	ブルシアンブルー
153	3.7	2.35	1.2	0.04	ブルシアンブルー
154	6.75	3.2	1.9	0.16	パープリッシュブルー
155	4.525	3	1.5	0.09	オックスフォードブルー
156	2.7	2	1.1	0.02	ビーコックブルー
157	2.5	1.6	1.1	0.01	ビーコックブルー
158	4.425	2.6	1.8	0.06	ブルシアンブルー
159	4.175	3.0	1.2	0.07	ブルシアンブルー
160	4.25	2.35	1.8	0.07	ブルシアンブルー
161	3.725	3.95	1.5	0.18	オックスフォードブルー
162	4.95	3.3	1.9	0.13	オックスフォードブルー
163	4.2	3.85	1.4	0.11	ダービーブルー
164	4.825	4.0	1.7	0.14	パープリッシュブルー
165	4.55	4.35	1.5	0.14	パープリッシュブルー
166	4.625	3.1	1.2	0.09	インキブルー
167	4.95	2.65	1.7	0.1	インキブルー
168	4.3	3.15	1.3	0.08	インキブルー
169	4.875	3.2	1.4	0.11	ブルシアンブルー
170	3.65	2.2	1.4	0.14	シーグリーン
171	3.925	2.9	1.9	0.06	パープリッシュブルー
172	3.6	1.35	1.2	0.03	オックスフォードブルー
173	3.425	1.85	1.1	0.03	オックスフォードブルー
174	3.25	1.7	1.2	0.03	ブルシアンブルー
175	3.35	1.65	1.1	0.03	ブルシアンブルー
176	3.6	1.8	1.2	0.03	ブルシアンブルー
177	3.45	1.7	1.1	0.03	ブルシアンブルー
178	3.5	1.7	1.1	0.03	ブルシアンブルー
179	5.0	4	1.2	0.15	ビーコックブルー
180	3.5	1.6	1.1	0.02	ブルシアンブルー
181	4.25	2.9	1.3	0.08	ブルシアンブルー

第20表 SM1003周濠内出土土器観察表

番号 押出 回版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
183 49	廣丘上	杯盤	口径 11.35 基高 4.65	全体に丸みを帯びた器形で、腰やかなカーブで口部に至る。口縁断面はわずかに外反している。	天井部外側は回転ヘラ切り後、ナゲによる調整。頂部へラクリーの底部に凹部へラケツリ、その他の部分は回転ナゲ調整。	灰色	灰、径0.5mm未満の砂粒多く含む	良好	時計回り	
184 49	周濠	杯盤	口径 11.65 基高 3.4	大井底は緩やかなカーブをもち、肩部にはわずかな腰がある。1腰部はわずかに外反し、尖り気味におさまる。	天井部外側は回転ヘラ切り後、その他の部分は回転ナゲ調整。天井部内側は回転ヘラクリー後、一定方向ナゲ。	(外)青褐色 (内)青灰褐色	灰、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
185 49 27	廣丘上	杯盤	口径 9.8 基高 4.2	全体に丸みを帯びた器形で、口部に比して器底がやや大きい。腰部分が厚く、口縁断面は丸くおさまる。	天井部外側は回転ヘラクリー後ナゲによる調整。その他の部分は回転ナゲ調整。	青灰色	灰、径1mm未満の砂粒や多く含む	良好	不明	
186 49 27	杯	11世 16.8 基高 4.1	丸みを帯びた器形から緩やかなカーブで口縁部に至る。口縁断部はごくわずかに外反する。	底部外側の平坦部は回転ヘラクリー後ナゲによる調整。その他の部分は回転ナゲ調整。	暗紫褐色	灰、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り		
187 49 27	杯	口径 11.2 基高 3.75	平底から緩やかなカーブで口縁部に至る。口縁部はわずかな屈曲により丸められ、内窓はわずかに開閉する。	底部外側は回転ヘラクリー後ナゲ調整。その他の部分は回転ナゲ調整。ナゲ調整による器底の凹凸が多い。	刷毛状色	灰、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り		
188 49	周濠	高杯 脚部	脚高 9.5	脚部へ向けて弧形的に開く脚形の高脚脚部。脚部足は強くつまみ出され、丸くおさまる。	残存部位は回転ナゲ。	灰白色	灰、径0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
189 49	兔生土 器 盤	口径 20.5	くの字状に延びる縦の口縁部分。口縁部に向外て丸みがあり、ナゲによる端面をもつ。	輪郭により輪郭不可。	褐色	灰、径1mm未満の石片などわずかに含む	軟質			
190 49	兔生土 器 盤	脚高 6.45	真横をバク旋にし、直線的に立ち上がる体部をもつ。	底面はユビオサエ、その他の残存部位は輪郭により輪郭不可。	(外)にぼい青褐色 (内)にぼい黄褐色	灰、径2mm未満の石片、良石などを含む	軟質			
191 49	上脚盤 蓋	口径 23.45	頭部に瘤状な基部があり、口縁断部に向けて大きく開く形の口縁部分。器底は全体で厚いが、底部に内側へ厚くなるつくり。端部は丸くおさまる、端部はちまたない。	残存部位はヨコナゲ調整。1腰部内側にやや強いナゲ。	にぼい青褐色	灰、径1mm未満の砂粒が常に多く含む	良好			

第21表 SM1003壇丘内出土埴丘内観察表

番号 押出 回版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
192 50	壇丘北 東	杯盤	口径 12.4 基高 3.4	やや幅下で丸みを帯びた器形をもつ。天井部の緩やかなカーブから下方へ折り曲がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさまる。	天井部外側は回転ヘラクリー後、その他の部分は回転ナゲ調整。	灰白色	灰、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
193 50	瓶底 裏	杯	口径 10.2 基部 12.05 高さ 0.75	小形の杯に縦断片。全体に開いたりある。立ち上がりは上方へ漸進的に伸び、脚部は丸くおさまる。	残存部分は回転ナガ調整。	淡黄色	密、径1mm 溝の砂粒わずかに含む	乾燥	不明	
194 50 27	高杯 脚部	脚端	9.3	端部へ向けて八の字状に開き高杯脚端片。脚部は上方に盛りており、突出度は下方が大きく端部は鋸角的にあります。	脚端部は回転ナガ調整。	淡オリーブ灰色	密、径1mm 溝の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
195 50 27	周縁、 瓶底	平底	11.6 5.6 最高 9.9 最大 11.05 脚部 3.4	形態の個体差の外添に始めて脚部をもつ。全体は丸みで上半にもち、全体に丸みがある。全体は外側へ緩やかに外反し、脚部は丸くおさまる。	全体下部は回転ヘタ削り後、丁寧なナガ。その他の内面は回転ナガ調整。	(外)灰色・黑色 (内)青灰色	粗糲	良好	不明	
196 50 27	横底内	甕	口径 20.7 基部 40.6 最大 42.9 脚部 17.3	全体はやや上位に透光源をもつ形状で底部はややすばり気味である。口部は上方へ直線的に開く。(脚部は外側に大きく肥厚し、尖り気味におさまる。脚部は絞じて薄く、底部付近が少し重い。	全体外面は平行タキ後回転カキメ、内面は同心円文タキ後部分にナガ削り。口周部は回転ナガ調整。	オリーブ灰色 ・オリーブ黒色・青灰色	密、径3mm 溝の砂粒わずかに含む	良好	不明	

第22表 SM1004石室内出土須恵器観察表

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
197 50 33		杯	口径 10.5 基部 3.7	丸い天井部をもつ甕。口部内面はわずかに肥厚し、外張りがあり、脚部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘタ切り後、無調整。その他は回転ナガ調整。	(外)青灰色 ・暗青褐色に (内)青灰色	密、径1mm 溝の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
198 50 33	周縁内	無蓋甕 杯	口径 13.0 基部 9.5 脚端 10.15	丸い底面の脚部に脚部を付ける。杯部は底やかなカーブで口部に肥厚し、わずかに外反して丸くおさまる。脚部は丸めがりで、底部に向けて八の字状に大きくなっている。脚部はわずかに下方へ張りし、丸くおさまる。	杯底部外面は回転ヘタ削り、その他の内面は回転ナガ調整。	灰白色	密、径3mm 溝の砂粒わずかに含む	乾燥	時計回り	
199 50 33		無蓋甕 杯	口径 13.7 基部 10.1 脚端 9.65	受け部をもたない底面の杯部に脚部を付ける。杯部は底やかなカーブで口部に肥厚し、わずかに外反して丸くおさまる。脚部は丸めがりで下方へわざかに張りしている。	杯底部下面は回転ヘタ削り、その他の内面は回転ナガ調整。杯底部内面は回転ナガ後一定方向ナガ。	灰白色・灰色 密	良好	時計回り		

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
200 58 33	高杯 杯部	口徑 13.1	浅い皿形の杯部をもつ裏 脚。腰やかに立ち上がり、脚部附近までによ ってわずかに外張る。 脚部はやや退いものが付 くと考えられる。	杯底部外側は回転ヘラ削 り。その他の技倣部は回 転ナガ削製。	灰色	精良	良好	時計回り		
201 58 33	瓶蓋高 下	LJ座 14.9 脚高 9.7 脚幅 10.8	浅い皿形の杯部に脚部を付ける瓶蓋高杯。杯部は腰 やかなカーブの笠型口縁 部になり、脚部は外反 脚底である。脚部は下半 1/3で大きめ外側へ開 き、脚部はわずかに下へ 斜張しておさまる。	杯底部外側は回転ヘラ削 り。その他の技倣部は回 転ナガ削製。瓶蓋内 面には口縁部接合時の較 った痕跡。	灰白色	滑、径0.5mm未 溝の移板少し 含む	軟質	時計回り		
202 58 33	瓶	口徑 10.6 最大 9.2 脚部 3.2	最大部分が側面突出して いる体部と大きく開いた 口縁部の技倣部。脚部は 体部の平均部分をもち、 最高部分には鋸い状脚 部が1条通り円孔を穿つ。 口縁部は弱い脚底を経て 大きく開き、脚部は丸く おさまる。	体部下半は回転ヘラ削 り、脚部止ヘラ削り、その他の は回転ナガ削製。瓶蓋内 面には口縁部接合時の較 った痕跡。	灰白色	精良	中や軟質	時計回り		
203 58 33	平盤	口徑 6.5 器高 15.6 最大 15.6 脚部 3.55	輪郭部の体部に鋸く切り 1脚部が付く。口縁部は 体部との接合箇所が鋸く くびれ足部レコ縫に向け まっすぐ開く。	体部下半1/3は回転ヘ ラ削り、上半1/3は回 転カキメ削製。その他の は回転ナガ削製。	(外)暗灰色 (内)灰色	滑、径1mm未 溝の移板わざ かに含む	良好	時計回り		

第23表 SM1004出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦 径	横 径	幅	厚	重さ(g)	材 質	技 法
204	30.55	29.05	8.35	9.80	3.49	鋼地銀	中空

第24表 SM1004出土鉄鎌計測表

(単位mm)

番号	出土位置	型 式	全 長	鎌身部長	鎌身部幅	鎌身部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚
205	第2次床面	平造方頭式	—	6.8	2.9	0.25	—	0.55	0.3
206	第2次床面	平造方頭式	—	6.75	2.95	0.3	—	0.65	0.3
207	第2次床面	平造方頭式	—	6.55	2.8	0.25	—	0.45	0.3
208	第2次床面	平造方頭式	—	—	2.6	0.3	—	—	—
209	第2次床面	平造方頭式	—	—	—	0.4	—	—	—
210	第2次床面	平造方頭式	—	—	2.7	0.3	—	—	—
211	第2次床面	平造方頭式	—	—	—	—	4.35	0.5	0.3

第25表 SM1004周濠内出土須恵器観察表

番号 種類 回数	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
212 61 33	周濠	杯蓋	1.1径 9.25 器高 2.9 受部 11.05 立上 3.0	側平な形状に欠損しているが宝珠形のつまみがついて思われる杯蓋片。かくは内縫し、やや尖り気味におきめる。内面の屈曲は強い。	天井部外表面は回転ヘラ削り。その他は回転ナナ子調整。	(外)青灰色 (内)青緑灰色	密、径1.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
213 61 33	周濠上・底	口盤	1.1径に比して丸みを帯び、やや縮めの器底をもつ。立ち上がりには内縫し、底部は尖り気味で、内面の屈曲は弱い。	底部外周は回転ヘラ削り。その他は回転ナナ子調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り		
214 61 33	周濠上・底	最大径	9.72 器高 3.7	側部の腹部をもつ。底部の男には弱い1条の沈線が通り、最大径部分には円孔が開け上方より穿たれる。底部は細くしまり、上方に大きく窪くと考えられる。	底部下半は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り後静止ヘラ削り。その他は回転ナナ子。	青灰色	密、径3mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
215 61 33	周濠	無蓋壺	口径 12.6 器高 9.9 脚端 9.3	やや圓錐の早い球形の形態に脚部を付す。底部やかなカーブで、器底にいたり、端部は内面がわずかに肥厚し丸くおさまる。脚部は末広がりで、下半で大きく外側へ開く。	杯底部外表面は回転ヘラ削り。その他は回転ナナ子調整。	灰色・灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	下面の漆表面に状

第26表 石敷状遺構内出土土器観察表

番号 種類 回数	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
216 64 34	石敷内	杯蓋	口径 12.2	丸みを帯びた器形をもつ。所てて、口縁部内面でわずかに剥落し端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナナ子調整。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
217 64 34	石敷内	杯蓋	口径 12.2 器高 3.5	天井部が平坦で、小明鏡的な底部をもつて口縁部はいたる。(1種況の指標は高く、底部は丸くおさまる。	天井部底は回転ヘラ削り。その他は回転ナナ子調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
218 64 34	石敷内	杯蓋	口径 9.5	小形の杯蓋の口縁部。底部やかなカーブで、器底にいたり、端部はやや尖り気味である。	残存部位は回転ナナ子。	暗青灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	

番号 付箇 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
219 64	石敷上 面	杯	口径 10.15 高さ 3.5 受部 11.85 立上 0.45	偏平な器形に丸い立ち上がりをもつ。受け部はナデにより上方へ反り、立ち上がりが強くなる。端部は丸くおさまる。	底部外周はハラ切り後、ナデ調整。その他は四輪ナデ調整。	明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
220 64 34	石敷東 面	杯	口径 10.4 高さ 3.45 受部 12.6 立上 0.35	偏平で丸みを帯びた器形に、丸い立ち上がりがつく。立ち上がりは内側し、内面に強い屈曲がある。端部は丸くおさまる。	底部外周は四輪へラ切り後、ナデ調整。その他は四輪ナデ調整。	(外)紫灰色、 暗紫灰色 (内)紫灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
221 64 34	石敷上 面	杯	口径 10.2 高さ 5.2 受部 12.4 立上 0.25	やや平坦な底部から腰やひに立ち上がりがてうけよに至り、腰く内側する立ち上がりをもつ。内面にはやや強い屈曲がある。	底部外周は四輪へラ切り後、ナデ調整。その他は四輪ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒多く含む	良好	不明	
222 64 34	石敷内	杯底	口径 9.5 高さ 3.4 受部 11.6 立上 0.35	輪郭つまみ共に偏平な杯底。かえりは内側して腰く、内面には強い屈曲がある。つまみは半球形の偏平化したものである。	大井羽外周は回転へラ切り後、ナデ調整。その他は四輪ナデ調整。	明青灰色	密、径4~5mmの砂粒含み、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
223 64	石敷内	杯底	口径 12.2	偏平な器形の杯底の口縁部。かえりは強く、断面二角形の突起となっている。口縁部は内面がわずかに肥厚し、丸くおさまる。	残存部分は四輪ナデ。	オリーブ灰色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	不明	
224 64 34	石敷内	杯	口径 9.2 高さ 3.95	平底に直線的に聞く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさまる。	底部外周は四輪へラ切り後無調整。その他は四輪ナデ調整。	灰色	密、径3mmの砂粒をわずかに含み、0.5mm未満の砂粒少しある	良好	時計回り	
225 64 34	石敷内	杯	口径 10.25 高さ 3.8	平底で外上方へまっすぐ聞く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさまる。全体に器壁が厚い。	底部外周は四輪へラ切り後無調整。その他は四輪ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
226 64 34	石敷内	杯	口径 10.4 高さ 4.4 脚幅 9.2	平底に斜削開先方型の高台を付し、裏やかなカーブで口縁にいたる。脚部は外反し、丸くおさまる。	底部外周は四輪へラ切り後、カキメ原体とナデによる調整。その他は四輪ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	

番号 部品	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
227 64 31	杯	口盤	14.9 4.35 9.2	平底に斜面内凹の凸台を つける杯身。口縁は腰や かに立ち上がり、わずか に外反する。底部は丸く おさまる。	底湖外側は目輪ヘラ切 り。その他の四輪ナガ削 等。	灰白色	褐、径0.5mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
228 61	石敢 屋	上部唇 件	12.3 3.4	口盤 唇高	瓶状であるが、体 部内凹に成形状態文か。 附近にナゲによってく れ状に外反し、底部は尖 り突起におさまる。	(外) 棕色 (内) 淡青褐色 褐色	墨、径0.5mm未 溝の砂粒やや 多く含む	やや軟質		
229 64 34	石敢 屋	平瓶	最大 16.15 腰部 4.9	倒錐形の体部にやや屈 り、口部と腰部をもつ。体部 は加大底を主にもち、 肩の張りがない。底部は やや平底である。	体部外腹下部は凹輪ヘラ 削り、体部上面は直輪か キメ開窓。その他の部位 は四輪ナガ削鑿。底部外 面に強いヒュオサ。	(外) 棕色・灰 白色 (内) 淡黄色・ 褐色	墨、径2mm未 溝の砂粒少し 含む	やや軟質 均一		

第27表 SM1005出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)	材質	技法
230	23.90	25.65	5.60	7.60	13.56	銅地銀	中実
231	22.85	25.90	5.90	6.70	12.31	銅地銀	中実

第28表 SK1001出土須恵器観察表

番号 部品	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
232 71 41	平底	最大 21.15 腰部 4.9	筒形で腰の張りが強い 体部の内凹部はの 損しているが、直線的 にくぼみが見られる。 底部の上面は緩やかなカ ーメットを呈している。	体部下半1/3以下は四 輪ヘラ削り、ただし、底部 は四輪ヘラ切り後ナガ削 鑿。その他の部分は四輪 ナガ削鑿。体部上面内側に の付着痕の跡跡。	(外) 銀青灰色 褐色 (内) 銀青灰色	墨、径3mm未 溝の砂粒やや 多く含む	時計回り			

第29表 SK1002出土須恵器観察表

番号 部品	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
233 73 41	杯	口盤	12.7 4.15	やや厚い内凹部をもつ 筒形で、腰やみなカーブ のまま口部にいたり、若 幹部は丸くおさまる。	天井部外周は凹輪ヘラ削 り、その他の四輪ナガ削 鑿。	青灰色	墨、径1mm未 溝の砂粒やや 多く含む	中実	反時計回 り	
234 73 41	蓋	最大 51.6 腰部 24.2	体部の最大径をやや上位 寄りにつけた形の体部で、 口部を欠損するが外方 方に立ち上がるらしい。 底盤は丸い。肩部には舟 手形4箇所につく。	体部内側は直輪の調整 アタリ後、三輪ナガメ 削鑿。内面は牛心形に削 みをもち直輪文となる。 舟心形当面にによる削 鑿。	緑褐色	墨、径3mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	小窓	仰臥上 手に右 側軽	

第30表 SK1002出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)	材質	技法
235	24.00	22.00	5.65	6.85	1.87	銅地銀	中実

第31表 第10・第11調査区出土土器観察表

番号 林蔵 図版	位置	断面	法長 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
236 75 41	10区下 井戸	口徑 14.2	丸みを帯びた底部をもつ 杯形片。口縁断面は丸く おさまる。ナデによる凹 凸が多い。	残存部は回転ナゲ調 整。	青灰色	密、径1mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明		
237 75	10-11 区アゼ	口徑 12	綺やかなカーブをもつ杯 底の口縁断面。底部は丸 くおさまる。	残存部は回転ナデ。	灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明		
238 75	11区左 古場	口徑 16.9 基高 3.65	丸みを帯びた半球形の構 造をもつ。壁盤が全体に 綺やかなカーブをもつ。口 縁断面にいたり、やや尖 り気味におさまる。	天井部外側は回転ヘタ削 り。その他の部分は回転ナ ゲ削り、一定方向ナ。	(外)灰白色 灰色 (内)青灰色	密、径2mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り		
239 75 42	上面	口径 10.3 基高 4.05	丸みを帯びた底部から綺 やかなカーブのまさに神 後無類型。その他の部分 には不明瞭な比較的1度過り、 断面は丸くおさまる。	底面外周は回転ヘタ削 り後無類型。その他の部分は回転ナ ゲ削り。	明青灰色	密、径1mm未 満の少し含む	良好	不明		
240 75	石敷家 男	口径 12.9 受部 13.2 立上 0.9	深い円形の底盤に低い立 ち上がりを有する。立ち 上がりは内傾し、端面は やや尖り気味である。内 面の粗面は弱い。	残存部は回転ナゲ削 り。	灰色	粗面	良好	不明		
241 75 42	10区上 南	口径 9.1 基高 3.35 受部 10.6 立上 0.3	口径・基高とも小形の杯 形片。立ち上がりは高く、 基部が丸いくつくり。内面 に強い屈曲がある。	回転ナゲ調整。底面外周 にヘタ削りの痕跡が明 顯に残る。	明青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	やや軟質	不明		
242 75 42	10区上 井	口径 8.8 受部 18.55 立上 0.35	小柄の杯身で、全体に唇 が弱い。内傾した立ち 上がりは上方へ反り、内 面にナデによる弱い凹線 が残る。内面の屈曲は強 い。	残存部は回転ナデ。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明		
243 75 42	11区基 作土	口径 8.7 基高 3.2 受部 10.8	唇形・底盤形のつまみが 共に偏平な形態。かえり は基部が太く内傾してお り、端面はやや尖り気味であ る。	大井部外周は回転ヘタ削 り。その他の部分は回転ナゲ削 り。	暗青灰色	粗面	良好	時計回り		
244 75	10区上 付食層	口径 13.5	非常に偏平な唇形の杯底 で、天井部にはやはり偏 平なつまみがつくもので ある。かえりは強く内傾 し、断面二角形を呈して いる。	天井部外周は回転ヘタ削 り。その他の部分は回転ナゲ削 り。	青灰色	密、径1mm未 満の砂粒多く 含む	良好	反時計回 り		
245 75	10区上 アゼ	口径 14.5 受部 12.3	非常に偏平な唇形をもつ 杯底断面。かえりは角の 丸い断面二角形で内 面の底盤はやや尖り。口 縁断面は丸くおさまる。	天井部外周は回転ヘタ削 り。その他の部分は回転ナゲ削 り。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	反時計回 り		

番号 種別 回数	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
246 75 25	II区位 舌端	杯窓	口径 7.5	個半な桶形の杯蓋口と底部 片。内面のかえりは断面 △角形を示している。	残存部位は回転ナメ調 型。	灰白色	精良	良好	不明	
247 75 42	10-11 区アゼ	杯窓	口径 15.15	扁平な桶形の杯窓で、欠 點として内面も側面下の方 へと見えられる。かた りは底く断面△角形で内 面にやや強い弧曲があ る。口縁部は丸くおさ まる。	大丹波外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分は回転ナメ。	青灰色	底、径2mm未 溝の砂粒多く 含む	良好	反時計回 り	
248 75 42	上部	杯	口径 13.25 高さ 4.95 脚幅 7.75	平底に断面が幾何形に近 い高台を有する杯部と底 片。口縁部は底やかと上 方へ立ち上がり、端部は 丸くおさまる。	残存部位は回転ナメ調 型。	明青灰色	底、径0.5mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	不明		
249 75 42	10区上	杯	口径 16.0 高さ 4.6 脚幅 9.1	平底に断面方形の高台を つける杯身。底やかなま で口縁にいたり、わ ざかに外側する。底部は 丸くおさまる。	底部外縁は回転ヘラ削 り、その他は四輪ナメ調 型。	藍灰色	底、径0.5mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
250 75 42	10-11 区アゼ	台付盆	脚幅 8.15	台付盆の底部と脚部との 接合部位。底部は側部 の裏形で、中半に4条の ひしや間へ接縫がある。 端部は内面側へ斜めに拉 張し、丸くおさまる。	笠底部外縁は回転ヘラ削 り、その他の部分は回転ナメ調 型。底部内面に脚部へ の接合跡のエビオサ。	灰	底、径1mm未 溝の砂粒や 多く含む	良好	時計回り	
251 75 42	10-11 区アゼ	台付盆 裏蓋 (?)	脚幅 8.4	短く、外側へ弱く傾く。 底部は水平方向と下方へ 大きく傾張し、下方の脚 部はやや尖り気味であ る。	残存部位は回転ナメ。	灰褐色	底、径0.5mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
253 75	11区位 舌端	杯	口径 9.8	II輪部でくの字状に當出 し、大きさ開くはそう。 底部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナメ調 型。	(外)暗青灰色 (内)青灰色	精良	良好	不明	
254 75 42	10区下 舌端	提鳳	最大 15.55	偏球形の底部をもつ提鳳 器。側縁の口縁を削り、追加 しており、追化し浮出感と なった昂部をもつ。	製作時下面であった脚を 回転ヘラ削り。上面であ った脚を回転カキメ調 型。	(外)オリーブ 灰色、灰色 (内)灰白色、 灰色	底、径2mm未 溝の砂粒SU 混合含む	良好	時計回り	
255 75 42	11区ア ゼ	瓶	最大 9.55 底部 3.55	偏球形の底部に大きくな く口縁部を付す。底部は 最大径をやや上部にも ち、底部は丸い。肩部に 2条の沈紋が並ぶ。中位 に凹孔が穿てられていた部 分は、遺失していない。 瓶部は内径で1.8cmと細 くしまり、外側へ大きく 開く。	直端下半外縁1/3は回 転ヘラ削り、筒内底底部 は円形向て鼻による押 圧。その他の部分は回転ナメ調 型。	(外)暗朱灰色、 青緑灰色 (内)暗紫灰色	やや粗、径2 mm未溝の砂粒 多く含む	良好	反時計回 り	
256 75 42	10区上 舌端	祭生土 器	底径 11.3	ペタ底の底や大きな底 脚部から上方へと立ち上 がる体部をもつ。立ち上 がり部分の周縁は1.4cmで ある。	体部外縁にハケメらしい 痕跡。体部内面は左上方 へのヘラ削り。底部の周 縁にはナギが隠る。	青	底、径4mm未 溝の砂粒や 多く含み、暗 品の砂粒を含む	やや軟質		

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
257 75 42	10区下 包含層 表面	舟形 瓦器	7.3	表面をベク高としており、ナメによって端部が外へ張り出す。底部は外上方へ大きく開く。	全体外面は上方へのカケハケ、内面は左上方へのへり削り。底部はナメ及びビコボサヌ。	(外)にぶい青 色 (内)灰白色	密、径4mm 溝の砂粒及び 結晶片含む	やや軟質		
258 75 42	10~11 区アゼ 底	11底 器	26.5	この字形に外側へ届きする張りの構造。周縁は内面において特に明瞭で、端部に向けて外反しながら腹面をつくり角くおさめる。	全般的に横ナギによって網目し、届出部にはユビオヌエが施される。	にぶい黄褐色	やや粗、径3 mm溝の砂粒 非常に多く含む	良好		

第32表 第10・第11調査区出土石磁計測表

(単位mm)

番号 図版	押印	図版	形 式	石 材	全 長	幅	厚 み	重 量 (g)
259	76	42	凹基無茎	サヌカイト	19.00	18.00	3.50	1.31
260	76	42	凹基無茎	サヌカイト	23.00	21.50	4.20	2.11
261	76	42	凹基無茎	サヌカイト	25.00	19.50	3.80	1.20
262	76	42	凸基有茎	サヌカイト	34.00	20.40	4.30	3.45
263	76	42	凹基無茎	サヌカイト	28.00	21.00	6.00	2.95
264	76	42	凸基有茎	サヌカイト	28.00	22.00	4.70	2.87
265	76	42	凹基無茎	サヌカイト	29.70	22.30	3.80	2.98
266	76	42	平基無茎	サヌカイト	26.60	22.00	4.60	2.62

第33表 SM1007出土須恵器観察表

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼 成	回 転 台	備 考
268 84 46	高 8.1 3.35 10.9 立上 0.64	口徑 高 基高 受部 立上		基形・つまみ共に扁平な 皿。かえりは下方へ伸び る。端部はやや尖り気味にお さまる。かえり内面には 強い筋がある。	天井部外面は回転ヘラ削 り。その他のは回転ナガ削 り。天井部内面は回転ナガ削 り後不整方向ナズ。	青灰色	密、径0.5mm 溝の砂粒や 多く含む	良好	時計回り	
269 84	高杯窓	口徑 14.0 基高 5.85		基平なつまみを付し、丸 みをもっており器高が高 い。肩部には弱い棱と沈 線が底る。	天井部外面は回転ヘラ削 り。その他のは回転ナガ削 り。	青灰色	密、径1mm未 溝の砂粒たず かに含む	良好	反時計回 り	
270 84 46	高杯窓	口徑 15.9 基高 4.8		基形は全体に丸みを帶 び、内面の基部の凹凸が 著しい。11縦端部は丸く おさめる。	天井部外面は回転ヘラ削 り。その他のは回転ナガ削 り。天井部内面は回転ナガ削 り後不整方向ナズ。	(外)明青灰色 青灰色 (内)明青灰色	密、径0.5mm 溝の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り	
271 84	高杯窓 鏡透	口徑 14.6 基高 4.1		肩部に明瞭な紋様が1条 通り、天井部と口縁部と が明瞭に分かたれる。器 底は全体に深く、端部は 丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削 り。その他のは回転ナガ削 り。	青灰色	密、径3~5 mmの砂粒ごく わずかに含 み、径0.5mm 溝のやや多く 含む	良好	反時計回 り	

番号 試験版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
272 84	高杯底 口径 13.6	天井が丸みを帯びると考 えられる器の口縁部分。 逆化して凹い腹と円錐が あり、口縁部に丸くおさま る。	窓有部位は回転ナゲ た。	灰白色	密、径0.5mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	不明			
273 84 國	1次底 高杯底 口徑 15.5 器高 4.8	半球な天井部をもち、わ ずかに内凹する口縁をも つ。口縁部は内面がわ ずかに削厚し、丸くおさ める。	天井部外側は回転へラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。	(外)灰白色・ 灰 (内)灰色	密、径0.5mm未 溝の砂粒わず かに含む	やや軟質	時計回り			
274 84 実	2次底 高杯底 口徑 13.5	やや直立気味の器の口縁。扶手部位は回転ナゲ調 整。肩の部分に凹い腰 をもち、縁部は丸くおさ まる。	天井部外側は回転へラ削 り。その他の回転ナゲ調 整。	灰白色	密、径1mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明			
275 84 46	高杯底 口徑 13.8 器高 4.25	やや平坦な天井部をもつ 器。口縁はややかにカーブ し、縁部でごくわずかに 外反する。	天井部外側は回転へラ削 り。その他の回転ナゲ調 整。	青灰色	密、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り			
276 84	杯蓋 口徑 13 器高 4.3	丸みを帯びた扇形の杯蓋 片。口にはわずかに内凹 の名残があり、口縁部に等 しい。縁部はやや尖り氣味 におさまる。	天井部外側は回転へラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。天井部外側中腹に へらこじし?の痕跡 におさまる。	(外)黒褐色 (内)灰色	密、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り			
277 84 46	高杯底 口徑 12.8 器高 3.75	平坦な天井をもつ器。口 縁部はわずかに内凹し、 裏面はやや尖り氣味に薄 く仕上げる。	天井部外側は回転へラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。天井部外側に付回転 へラ切りの痕跡を明瞭に 残す。	(外)灰白色 (内)灰色	密、径5mmの 砂粒を含み、 径1mm未溝の 砂粒少し含む	良好	時計回り			
278 84 46	2次底 國・底 美	天井部がやや平坦な有天 高杯底。底はかなかオブ グで口縁にいたり、縁部は やや尖り氣味におさま る。	天井部外側は回転へラ削 り、へら削り前の器身へ ラ切りの痕跡明瞭。その 他の回転ナゲ調整で、大 片羽内側は回転ナゲ型、 一定方向ナゲ。	青灰色	密、径2mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り			
279 84 46	高杯杯 部	浅い追形の器形に無い立 ち上がりを見る。立ち上 がりは直線的に内傾 し、縁部はやや尖り氣味 である。縁部にナゲによる 凸窓しい。	窓有部位は回転ナゲ調 整。	灰白色	密、径0.5mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好	時計回り			
280 84 46	右蓋高 件	長脚2段足をもつ有天 高杯。杯底は丸みを帯び た浅い直形で、立ち上がり りをもつ。受け部の縁部 はも丸く、口縁底部は尖 り氣味におさまる。内面 は試用しない。脚部は八 の字状の直立がありで脚部 角め下方には平坦面を作 り出す。脚部中半には5 条の弱い筋膜を区画とし て、スリット状の細い溝 し穴を上下2列に穿つ。	杯底部外側は回転へラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。杯底部内側ははねナ ゲ後、一定方向ナゲ。	(外)灰色・暗 赤色 (内)灰白色	密、径1mm未 溝の砂粒や八 角多く含む	やや軟質	時計回り			

番号 試験版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
281 84 46	有蓋高 杯	口径 12.7 基部 14.85 受部 13.25 立上 0.35		脚部2段落しをもつて要 点。杯部はやや扁平で、 やや深めである。口部 は内傾し、縁部は少く火 附である。内面の筋条は 弱い。脚部は円柱状で、 半で外張り大きくな る。縁部は上下にわざかに膨 張する。古い沈殿2条に よって下部に沈殿し、そ れぞれに方形透しを上 下並列2方に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。	(外)青灰色 (内)紫灰色	青、径2mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り	
282 84 46	有蓋高 杯	口径 12.35 基部 14.25 脚部 16.6 受部 14.9 立上 0.6		脚部2段落しをもつて有 盖高。杯部はやや内張っ た浅い皿形で、上方へ火 附の短い立ち上がりをも つ。受け部分の縁部・口部 脚部はいずれも丸くカコ まる。内部の筋条はやや 強い。脚部は八の字形の 宋広がりで縁部斜め下方 には平腹線を作り出す。 脚部中半には2条の弱い 比較を仄顔として、スリ ット状の弱い透し穴をト ド並列に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。	(外)紫灰色 暗青灰色 (内)紫灰色	青、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
283 84	有蓋高 杯	口径 13.8 受部 15.9 立上 0.55		脚部2段落しをもつて有 蓋高杯。杯部は扁平で、 立ち上がりは低く柔ませ る。縁部はやや尖り気味 で、内面にはやや強い筋 条がある。脚部は円柱状 で下部で餘分に外側へ膨 く。2枚の弱い沈殿で2 段に区画され、下部並河 でスリット状の透しを上 方方に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。	(外)灰白色 (内)灰白色	青、径1mm未 満の砂粒むず かに含む	良好	反時計回 り	
284 84 46	有蓋高 杯	口径 12.4 基部 15.35 脚部 12.55 受部 15.35 立上 0.6		強半の杯部に脚部を付 く。杯部の立ち上がりは 内側より上方へ戻る。口部 内部の筋条は強く、縁部 は丸くおさまる。脚部は 長脚2段落しで、スリッ ット状の透孔を2箇所に上 下並列で穿つ。中半に弱 い比較を2条通らせる。 縁部は上下に抵抗感する。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。	青灰色	青、径0.5mm未 満の砂粒むず かに含む	良好	時計回り	
285 84 -8	P-2/P-高杯	脚端 12.25		下部で八の字形で大きく 開く高杯。杯部は偏平な盤 形で、立ち上がりが強く、 内側した後上方へ立ち上 がる。脚部は円柱状で、 弱い2枚の沈殿で底部さ れ、下部に並列のスリット 状透しを2方向に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。杯底部内面は回転ナ メ調整後一定方向ナメ	(外)灰白色 暗青灰色 (内)灰白色	青、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
286 84	有蓋高 杯	口径 13.35 受部 12.6 立上 0.35		脚部2段落しをもつて有 蓋高杯。杯部は偏平な盤 形で、立ち上がりが強く、 内側した後上方へ立ち上 がる。脚部は円柱状で、 弱い2枚の沈殿で底部さ れ、下部に並列のスリット 状透しを2方向に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の回転ナメ調 整。	(外)明青灰色 暗青灰色 (内)明青灰色	青、径0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り	

番号 種類 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
287 84 46	便座	口径 5.75 高さ 17.2 最大 13.05	偏球形の体部の側縁に口 縁を付す。体部は厚みが 9.2cmと特に厚く、内側 には整形成の凹部をも つてす。口縁部は直線的に 開き、端部は丸く尖り る。体部側に把手はも たない。	体部のうち、割合的下面 の外側は凹輪へラ削 り、上面側は切削ナダ削 りで、上面側内側には粘 土板の充填の痕跡、その 他の部屋は凹輪ナダ。	暗赤褐色	密、径3mmの 砂粒を含むほか、 径3mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り		

第34表 SM1007出土子持器台観察表

番号 種類 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
288 85 46	子持 台	口径 23.7 高さ 21.7 脚端 16.75	浅い皿形の鉢部と柱状の 脚部とこれら成る。脚部は 底に平底と口縁に向って 斜めやかなカーブで立ち 上がる。口縁は斜めややに 外反し、端部は丸みを帯 びた端面で立ち、沈縁が 1条ある。口縁部には杯 を4点子器として配す る。脚部は鉢部との接合 部でさす鉢部の形状に合 わせ外側へ開く。中央で は円錐形に伸び下垂り 3-8の字状に点錐的に 開く。中手に弱い3条の 沈縁を2单位差らせ、長 方形窓を上下並らせて、長 方形窓を2方に穿つ。脚端部はナダ によつて外反し、外側へ 大きくなっている。	鉢部外面は凹輪へラ削 り、その他は凹輪ナダ削 り、子器と鉢底との接合 部、脚部と脚底との接合 部には丁寧なナダが施さ れる。	暗赤灰色	密、径2mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り		
288 85	子持 台 蓋	口径 8.8 高さ 3.85	肩部分の張りのない丸み を帯びた器形に扁平なつ まみを付す。口縁部は 丸くおさまる。	天井部外面は凹輪へラ削 り、その他は凹輪ナダ削 り。	灰色	密、径2mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り		
288 85	子持 台 蓋	口径 10.5 高さ 4.15	丸みを帯びた器形に扁平な つまみを付す。腰帶が なカーブで外縁にいた り、端部はやや尖り気味 におさまる。つまみは斜 め上方へ倒り出し、中央 部がくぼむ。	天井部外面は凹輪へラ削 り、その他は凹輪ナダ削 り。	青灰色	密、径1mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り		
288 85	子持器 台 杯蓋	口径 19.3 高さ 4.2	肩部分に張りのない丸み を帯びた器形に扁平なつ まみを付す。口縁部は 丸くおさまる。	天井部外面は凹輪へラ削 り、その他は凹輪ナダ削 り。口縁部は凹輪ナダ削 り、横縁部は横輪ナダ削 り。	暗赤灰色	密、径2mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	時計回り		
288 85	子持器 台 杯蓋	口径 9.4 高さ 2.2	LH横縁部のみの袋足。丸 みを帯びた器形で端部は やや尖り気味におさま る。	凹輪ナダ削り。端部内外 両面は連続したエビオタ エ。	暗赤灰色	密、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	不明		
288 85	子持器 台 杯蓋	口径 8.8 受部 10.7 最大 0.75	側平面の器形に似たも のがりをもつ子持器台・子器 台。立ち上がりは内傾 し、高く仕上げられている。 内側には豊富な施縫がある。	施縫外側には凹輪へラ削 り、その他は凹輪ナダ削 り。	暗赤灰色	密、径2mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	時計回り		

番号 部品 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
288 85	丁持 台 杯	立上	9.5	偏平な底部の子持台子 脚部分の口縁部。立ち 上がりは内傾し、矧い。	残存部は回転ナガ調 整。底面内側には施用へ る場合時の無いスピオサ ズ。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明	
288 85	子持器 台 杯	口径	8.4	偏平な器形に短い立ち 上がりもつ子持台子基の 所持。立ち上がりは上方 へ反する。	底面外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。	暗紫灰色	密、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
288 85	子持器 台 杯	口径 台 杯	8.4 受部 10.35 立上 0.65	偏平な器形に口徑に比し てやや長い立ち上がりを もつ子持台子基の杯、盤。 立上(脚部)はやや外反し、 丸くおさまり、内面にや や豊かな筋がある。	底面外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
288 85	子持器 台 杯	11径 台 杯	8.4 受部 10.1 立上 0.55	偏平な器形に口徑に比し てやや長い立ち上がりを もつ子持台子基の杯、盤。 立上(脚部)はやや外反し、 丸くおさまり、内面にや や豊かな筋がある。	底面外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	

第35表 SM1008出土須恵器観察表

番号 部品 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
291 92	石室壁 土	杯皿	口径 9.0	11径・若高とも小形の杯 蓋は絞部片。蓋やかなな く、アーブで口縁部にいたり。 脚部は丸くおさまる。	天井部外側は底転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。	灰白色	精良	良好	時計回り	
292 92	石室底 杯	口径	12.85	短い立ち上がりを有する 杯の口縁部片。立ち上がり り内面の脚部は強く、口 縁部分は丸くおさまる。	残存部は回転ナガ調 整。	(外)暗灰色、 灰白色 (内)暗灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	
293 92	石室底 脚部	脚部	9.45	脚部へ向けて八の字状に 開く高脚張脚片。全体の 面積は少く、實際のもの のとしては頗めのものに なると考えられる。脚部 は下方へ斜張し、丸くお さまる。	残存部は回転ナガ調 整。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
294 92 48	石室壁 杯	脚部	11.1	末広がりの高脚脚部で端 部付近では僅へ大きくな る。脚部は下方への斜張 が著しく、丸くおさまる。	脚部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。	(外)灰褐色、 灰色 (内)灰色	径1mm未満の 砂粒わずかに 含む	良好	時計回り	
295 92 48	石室底 平底	口径	5.65 高さ 15.55 最大 17.35 受部 3.95	偏球形の体部に短い口縁 がつづく。口縁部は絞部 なくなり、脚部を丸く おさまる。中央に弱い沈 没が1条ある。	体部は下平は回転ヘラ削 り、その他の回転ナガ調 整。ヘラ削りは施設段に わたって行われている。	(外)青灰色、 オリーブ色 (内)青灰色	密、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好		
296 92 48	石室底 脚部	脚部	10.7	直並の脚部に脚部を付 す。脚部は同様の他の脚 部に比べ、やや深めとなる と考えられる。脚部は八 の字状で末広がりで、 脚部付近は大きく外側へ 開く。脚部は下方へ斜張 し、丸くおさまる。	脚部外側は回転ヘラ削 り、その後は回転ナガ調 整。	(外)暗青灰色、 青灰色 (内)暗青灰色、 青灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り	

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
297 22 48	石室前	無底高 杯	10.4	浅い底形になると考えら れる軒部に水広がりの脚 部を付す。軒部は脚やか なカーブで立ち上がり、 口縁はナゲによって外側 にわざわざに屈曲する。脚 部は脚部付近での字状 に入りく突き、脚部は下 方へ延長し尖り気味にお きめる。	軒底部外面は四輪ヘラ削 り、その他は回転ナゲ調 整。	(外)明オリ… ブ灰褐色・灰色 (内)灰褐色	青、径1mm未 溝・径0.5mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好	反時計回 り	
298 92 48	石室前	瓶	口径 18.25 脚高 42.05 最大 38.0 脚部 15.8	体部最大径を中半よりや や上部にもつ球形の体部 に短く外傾する口縁部を もつ。口縁部は脚部の筋 曲より緩やかに外反す る。端部には平底面を作 り出し、上方へ延長し丸 くおさめる。底部は脚や かな丸みをもつ。	体部外面は複数子タキ の後、刃脱カキメ調整。 内底は同心円当て足によ る押出。口縁部内外面は 回転ナゲ調整。	暗青灰褐色	青、径3mm未 溝・径0.5mm未 溝の砂粒の少 なくむずか に含む	良好	不明	

第36表 ST1006出土須恵器観察表

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
299 96 58	抜取り	杵	口径 10.4 脚高 4.4 最大 13.0 底上 0.3	浅い底形の器形に浅い立 ち上がりを付す。受け部 の脚部は平底面を作り出 す。立ち上がりより上方へ 度り、端部は尖る。内底 の足跡は強い。	底部外面は四輪ヘラ削 り、その他は回転ナゲ調 整。	(外)明青灰褐色 青褐色 (内)明青灰褐色 青褐色 (内)明青灰褐色	青、径1mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	時計回り	

第37表 ST1007出土須恵器観察表

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
300 98 58		杵型	口径 11.3 脚高 3.7	平坦な天井部から明顯な 肩部をもたず、下方へ折 り曲がり口縁に至る。端 部は丸くおさまる。	天井部外周は回転ヘラ削 り後、無調整。その他は 回転ナゲ調整。	(外)明青灰褐色 (内)明青灰褐色 地緑色	青、径2mm未 溝の砂粒や 多く含む	良好	反時計回 り	
301 98 58		杵	口径 19.15 脚高 4.1 最大 12.5 底上 0.35	やや重い杵形に短い立ち 上がりをもつ。立ち上がり は内傾し、端部は尖り 気味である。内面に強い 墨出がある。	底部外周は回転ヘラ削 り、その他は回転ナゲ調 整。底部外周中央部は回 転ヘラ削り後、ナゲ・オ リエによる調整。	灰色	青、0.5mm未溝 の砂粒少し含 む	やや灰質	反時計回 り	

第38表 ST1009出土須恵器観察表

番号 標記 回版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
302 102 38	杯置	口徑 12.5 高さ 3.9	丸みを帯びた唇形から鍔 やかなカーブで縁部に 至る。口縁部はわずかに 肥厚し、底面の名残をとど め、周辺は丸くおさまる。	火井部外側は回転ヘラ削 り。その他の回転ナガ削 り。	灰白色	青、径1~3 mmの砂粒ご とくに含み、 径0.5mm未満 の砂粒少しあ る	良好	時計回り		
303 102 58	杯	口徑 11.35 高さ 4.05 受部 12.5 立上 0.4	丸みを帯びた唇形に切 り立つ形をもつ。立ち 上がりは上方へ延び、口 縁部はやや尖り気味で ある。内面にはやや強い 黒斑がある。	底部外側は回転ヘラ削 り。その他の回転ナガ削 り。	青灰色	青、径1~3 mmの砂粒をご とくに含む か0.5mm未満 の砂粒わずか に含む	良好	時計回り		

第39表 石室状遺構出土須恵器観察表

番号 標記 回版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
304 105 62	台付碗	口徑 10.0 高さ 11.2 底大 11.4 脚輪 10.1	球形の体部に直ちに口 縁をもつ脚部と脚部の 間に、底部をから成る。底 部はなまらかな形態で、 上半には非常に弱い逆化 した状態が2条道ある。口 縁部内部は厚厚し、周辺 は丸くおさまる。周辺は 上開きし、斜め下方に取 り作られし、さらに下方 に抵抗している。	脚部外側は回転ヘラ削 り。その他の回転ナガ削 り。	灰白色	青、径1mm未 満の砂粒少しあ る	良好	時計回り		
305 105 62	台付碗	脚輪 ?	6.4	体部は口縁が上方へ伸 び、鏡形となると考え方 られる。周辺は粗く、端 部に凹凸で大きく窪んで 中半に3方向に延び3mm の円孔を穿つ。	体部下半外側は回転ヘラ 削り。その他の回転ナガ 削り。	暗青灰色	青、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	反時計回 り	

第40表 石室状遺構出土勾玉計測表

(単位cm)

番号	材質	A	B	C	D	E	F	重量(g)
306	ヒスイ	20.95	13.50	8.55	9.00	2.70	1.33	4.25

第41表 第12~第14調査区出土須恵器観察表

番号 標記 回版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
307 107	12区 包含層	杯置	口徑 13.8	鍔やかなカーブをもつ杯 置。底部にかけ や軽微な剥離が見くなり、丸 くおさまる。	底部外側は回転ナガ削 り。	青灰色	青、径1mm未 満の砂粒少しあ る	良好	不明	
308 107	13区 包含層	杯置	口徑 13.4	鍔やかなカーブの唇形を もつ杯置。底部にかけ や軽微な剥離が見こまる。	火井部外側は回転ヘラ削 り。その他の回転ナガ削 り。	灰白色	青、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	

番号	位置	器種	法身 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
309 107	12区 凹合層	杯蓋	11.8 11.3	丸みを帯びた器形をもつ 杯蓋の縁部片。若者にナ ゲによる凹凸が惹いたい 口縁部はやや尖り気味 におきまる。	片井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナガ削 り。	(外)明黄灰褐色 (内)明黄灰褐色	精良	良好	技術計画 リ	
310 107	13区 凹合層	杯蓋	11.8 11.85 2.7	口盤に比して周高の低い 偏平な杯蓋。内部で下方 へ仄れ曲がり口縁部にい たり、外反し丸くおさむ る。口縁端部外側には沈 線が1条近く。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナガ削 り。	青灰色	青、径1mm未 溝の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
311 107	13区 凹合層	杯蓋	11.8 12.6	赤みのためか、器高がか なり大きくなる杯蓋片。 丸みを帯びた器形で、施 墨は丸くおきまる。	残存部は回転ナガ削 り。	青灰褐色	青、径0.5mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
312 107	12区 凹合層	杯	12.75 受部 15.0 立上 0.3	偏平な器形をもつ杯身。 立ち上がりに短く内傾 し、底部はやや尖り気味 におきまる。	残存部は回転ナガ削 り。	暗青灰褐色	青、径0.5mm未 溝の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
313 107	12区 凹合層	杯	11.8 10.45 受部 12.7 立上 0.25	浅い環形の器形に短い立 ち上がりを有する。底部 が3~4mmと薄い。立ち 上がりに内傾し、底部は 尖り気味である。内面の 施墨はやや細い。	残存部は直軸ナガ削 り。	明青灰褐色	青、径0.5mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	不明	

第42表 第12~第14調査区出土石器計測表

(単位:mm)

番号	捕獲	図版	形 式	石 材	全 長	幅	厚 み	重 量 (g)
316	109	62	凹基無蓋	サスカイト	12.60	14.50	3.75	0.91
317	109	62	凸基無蓋	サスカイト	32.50	24.10	6.70	5.98
318	109	62	凹基無蓋	サスカイト	24.30	19.60	4.60	2.06
319	109	62	平基無蓋	サスカイト	31.00	20.00	5.50	2.30
320	109	62	凹基無蓋	サスカイト	31.30	22.50	4.00	1.70

写 真 図 版

図版 1



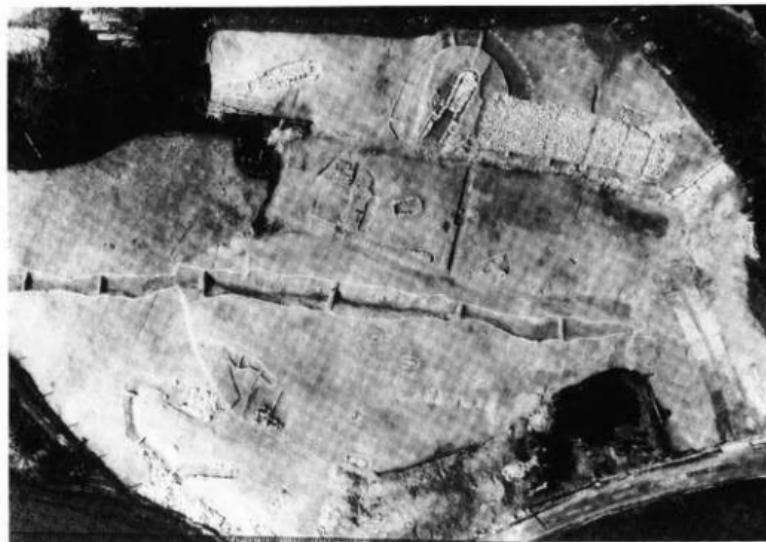
調査前全景（東より）



調査前風景（第 1 ～ 第 3 調査区）



調査区遠景（第4～第14調査区）



造構検出状況（第10～第13調査区）

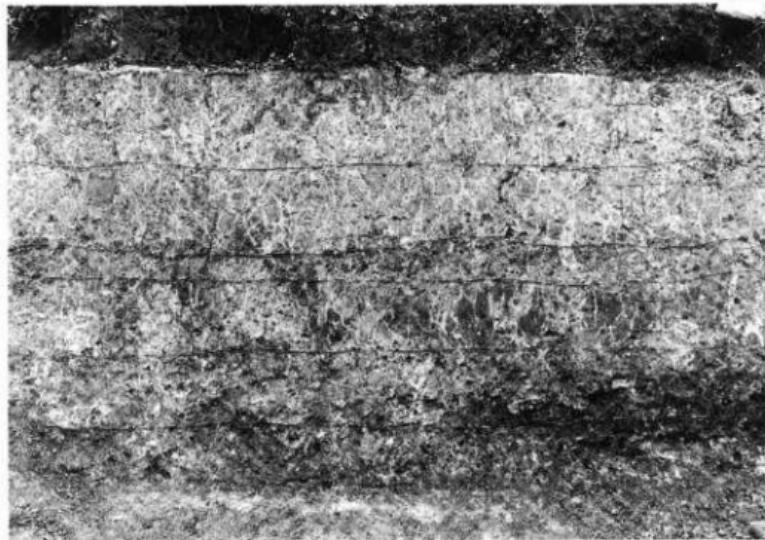
図版 3



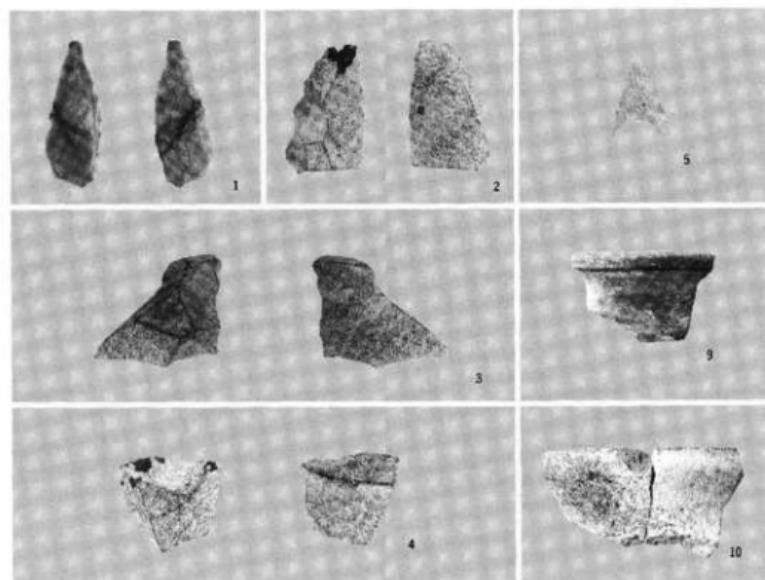
第 1 調査区完掘状況



第 2・3 調査区完掘状況



第1調査区土層堆積状況

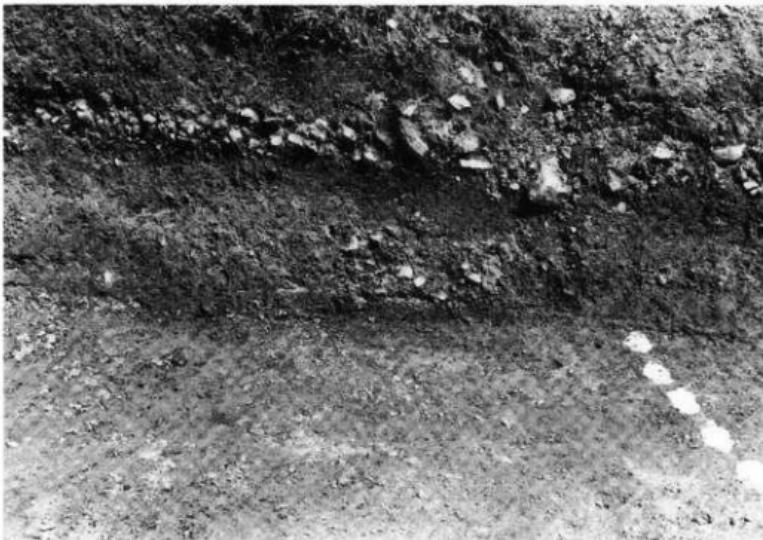


第1～第3調査区出土遺物

図版 5



第4調査区自然流路



第4調査区土層堆積状況



SM1001横穴式石室検出状況

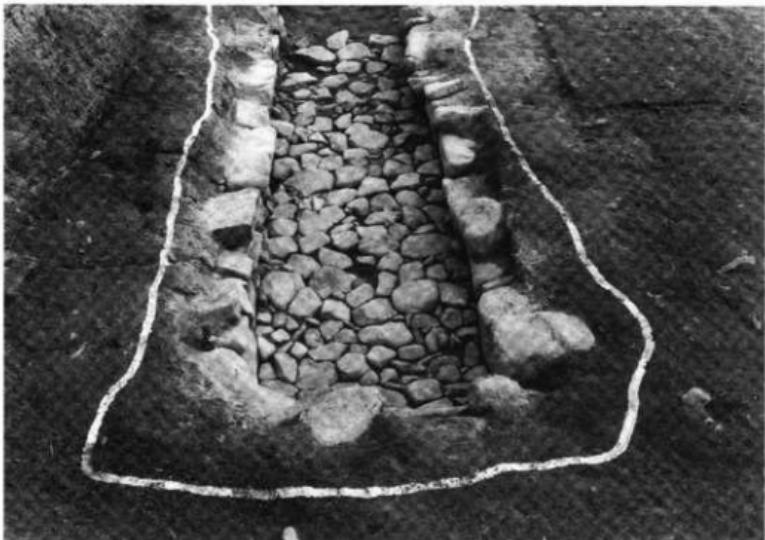


SM1001横穴式石室掘り下げる状況

図版 7



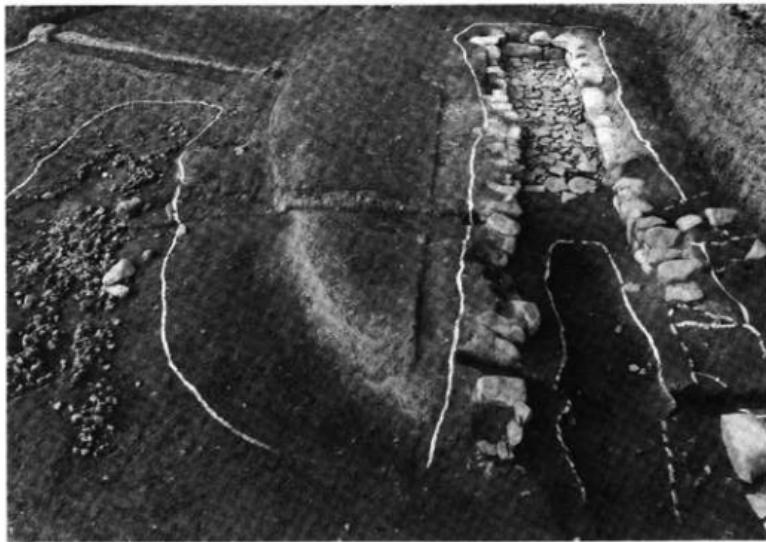
SM1001第一次床面検出状況 開口部より



SM1001第一次床面検出状況 奥壁部より

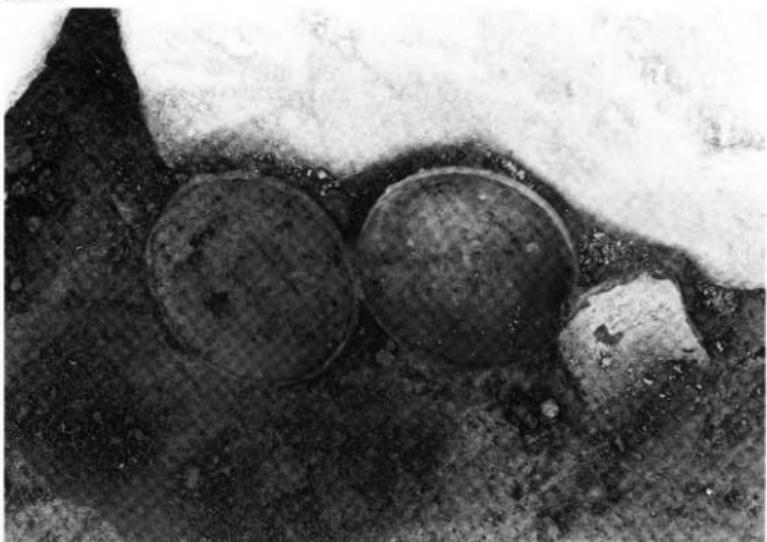


SM1001排水溝完掘状況

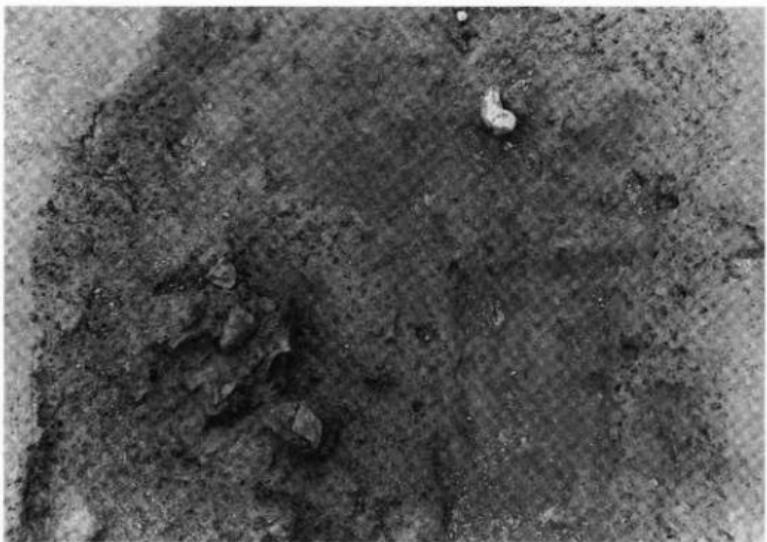


SM1001全景（南より）

図版 9



SM1001遺物出土状況（排水溝上面）



SM1001遺物出土状況（第一次床面下層）

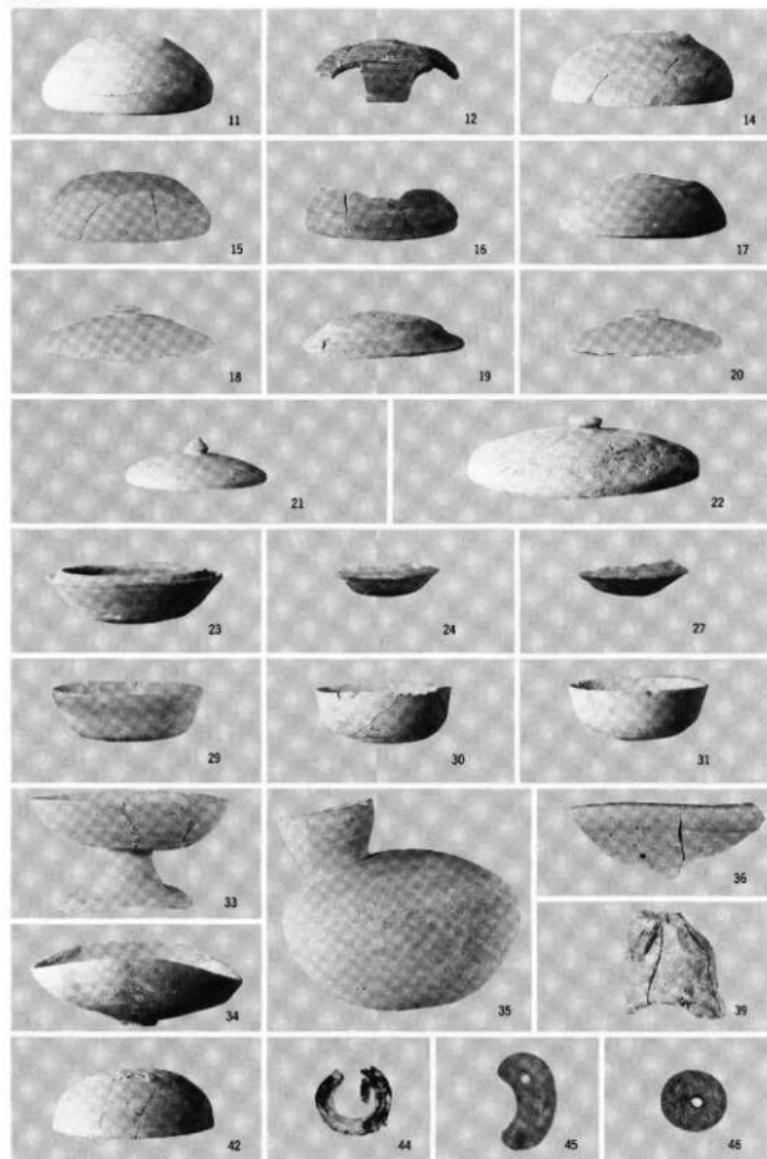


SM1001横穴式石室構築状況



SM1001横穴式石室掘り方完掘状況

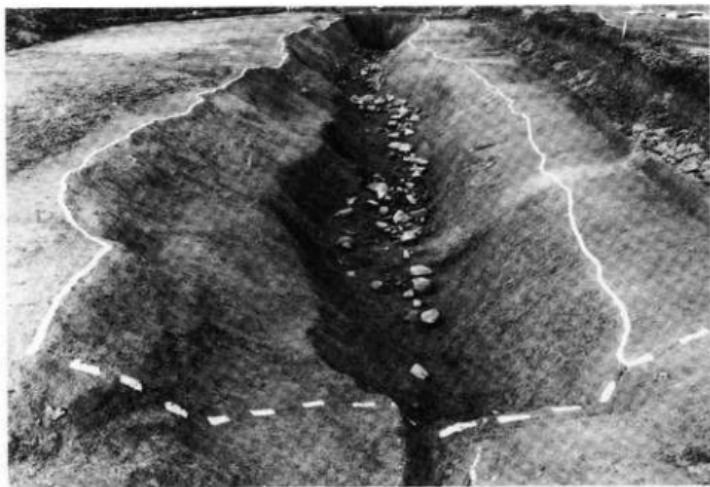
図版11



SM1001出土遺物



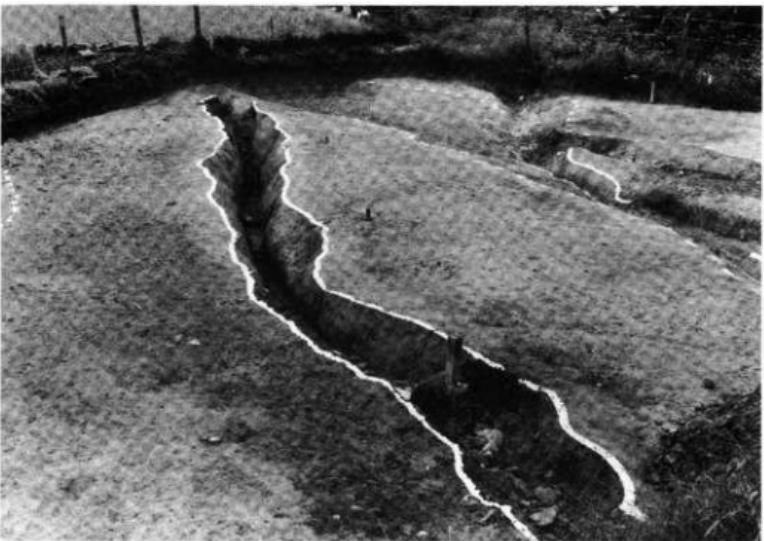
SD1001完掘状况



第5調査区SD1002・3完掘状况



第8調査区SD1002・3完掘状況



第9調査区SD1002・3完掘状況

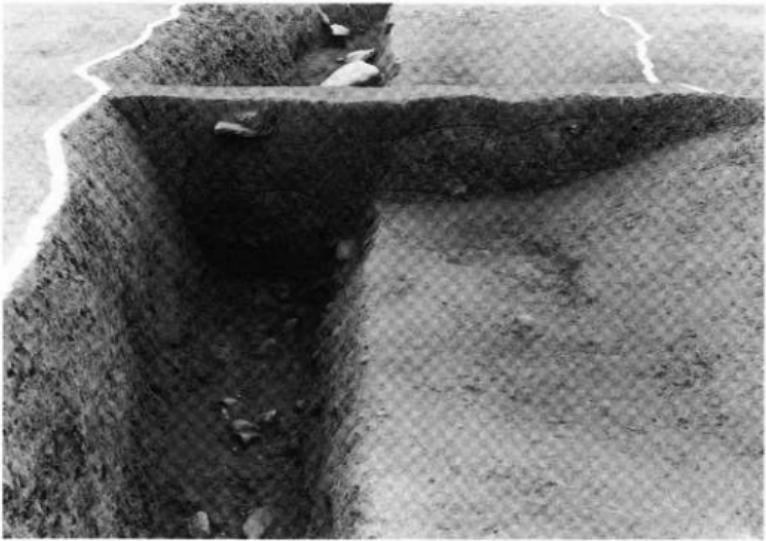


第5調査区SD1002・3土層（C-C'断面）



第7調査区SD1002・3土層（E-E'断面）

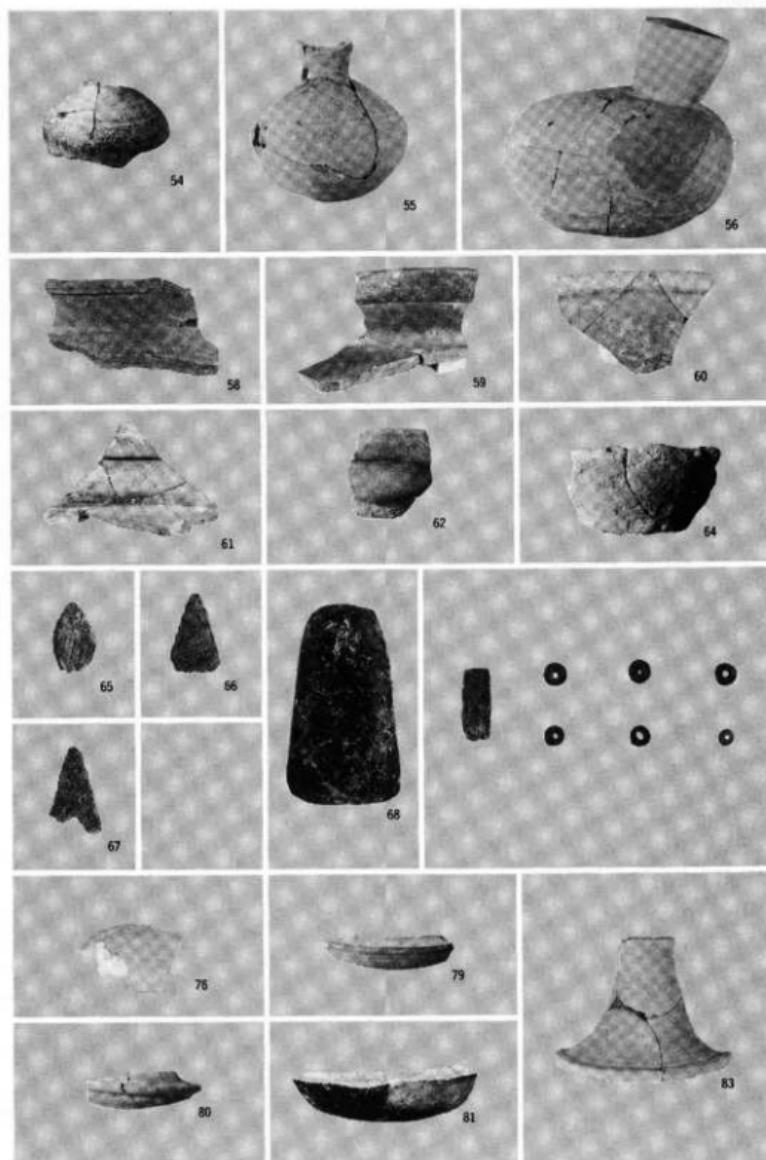
図版15



第8調査区SD1002・3土層(F-F'断面)

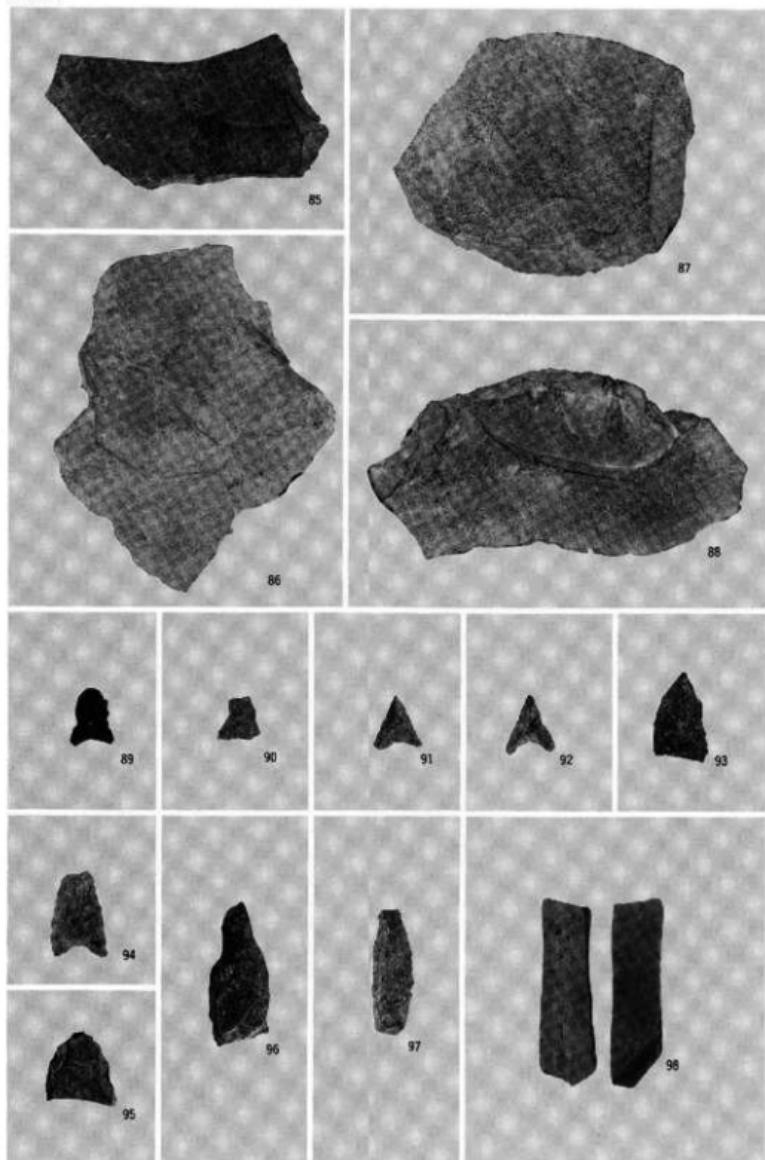


第8調査区SD1002・3(G-G'断面)

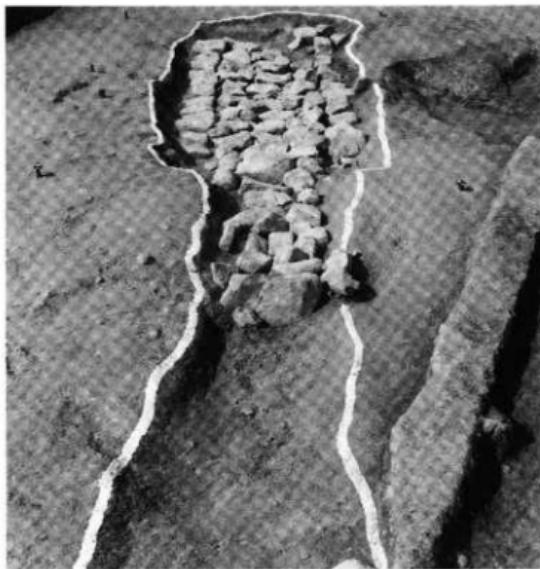


SD1002・3及び第4～第9調査区出土土器

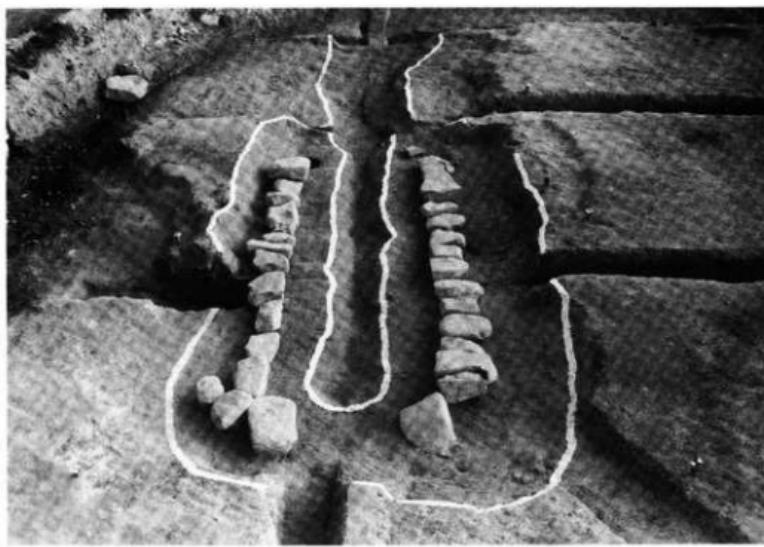
図版17



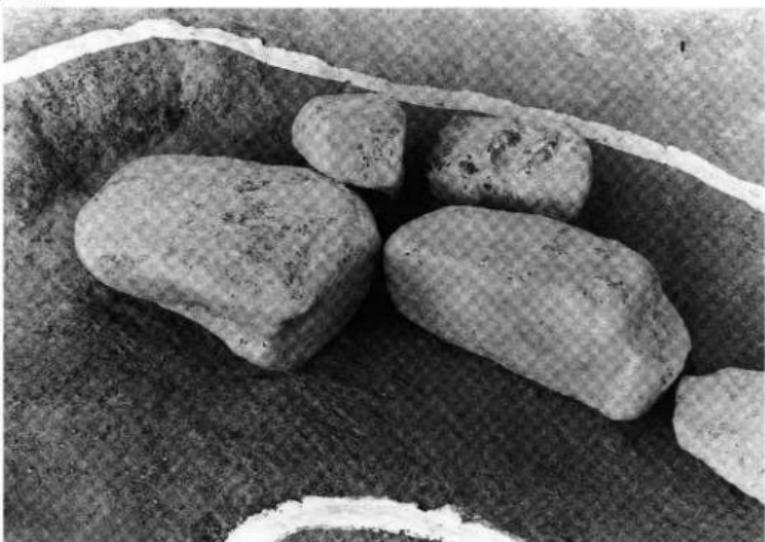
第4～第9調査区出土石器



SM1002全景（南より）



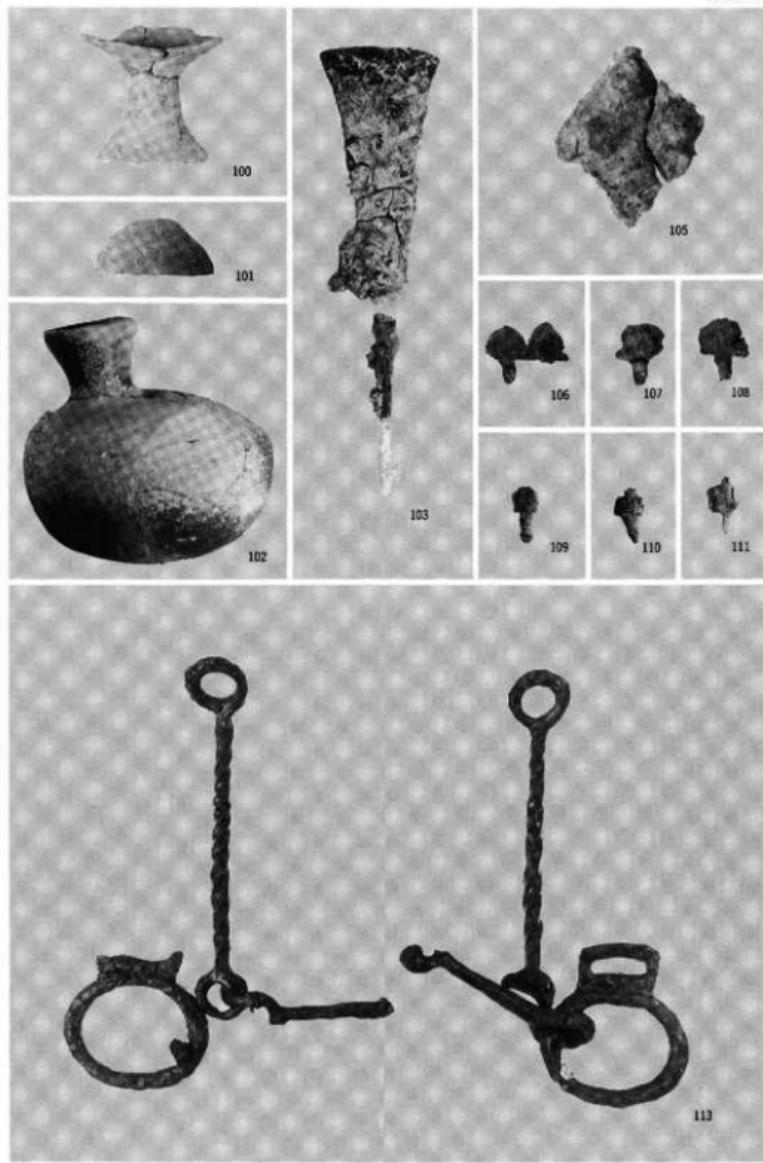
SM1002完掘状況



SM1002橫穴式石室構築狀況



SM1002遺物出土狀況

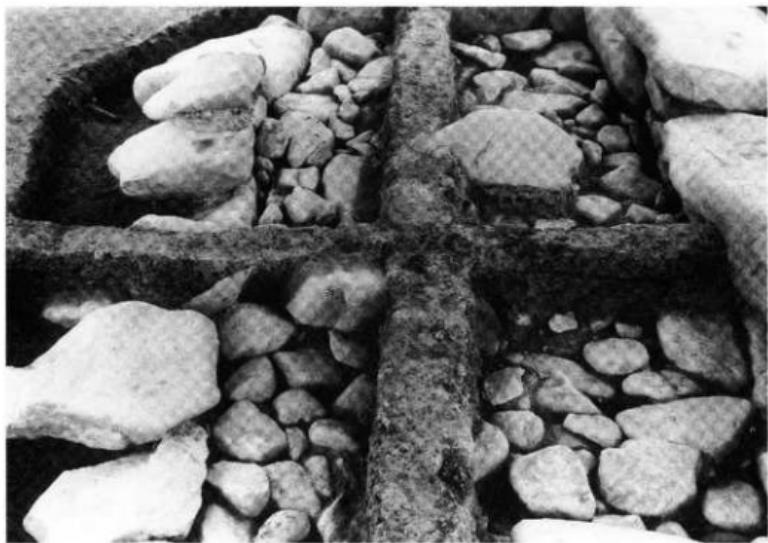


SM1002出土遺物

図版21



SM1003横穴式石室検出状況



SM1003横穴式石室掘り下げ状況



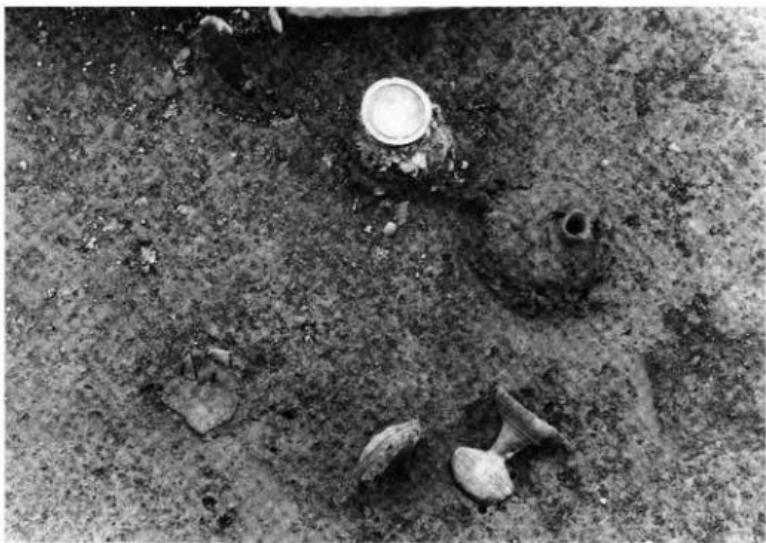
SM1003第二次床面検出状況



SM1003第二次床面遺物出土状況



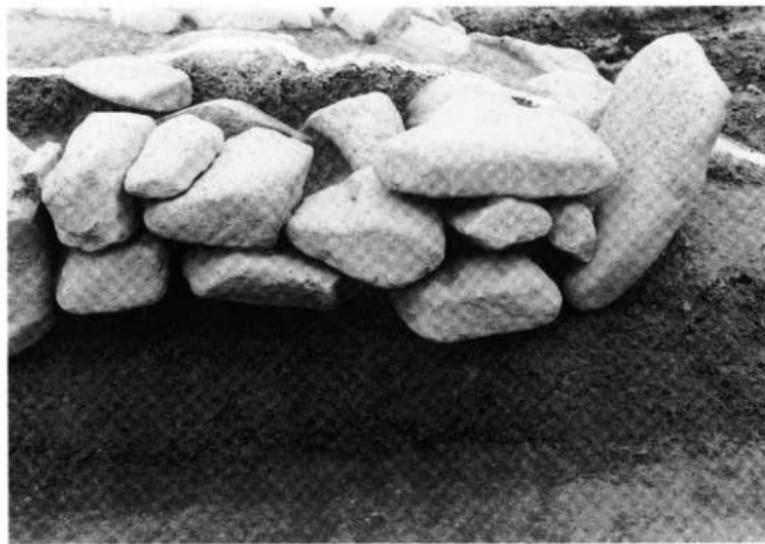
SM1003第一次床面検出状況



SM1003糞道部遺物出土状況

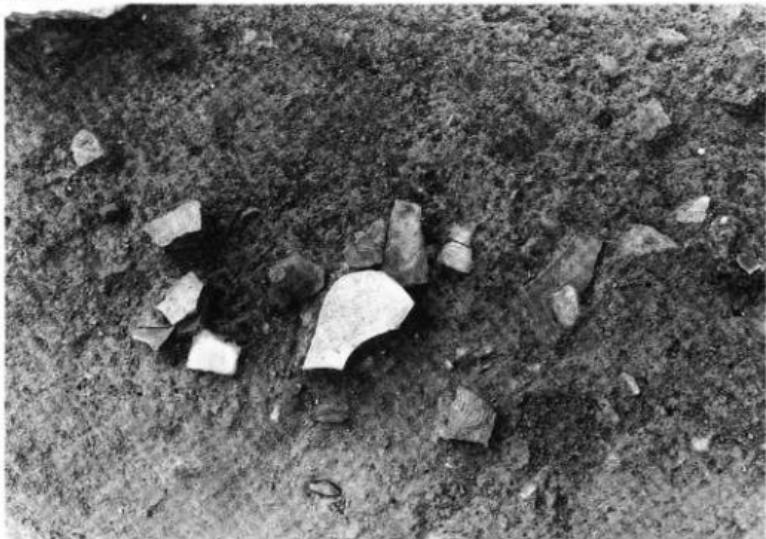


SM1003横穴式石室構築状況（玄門）

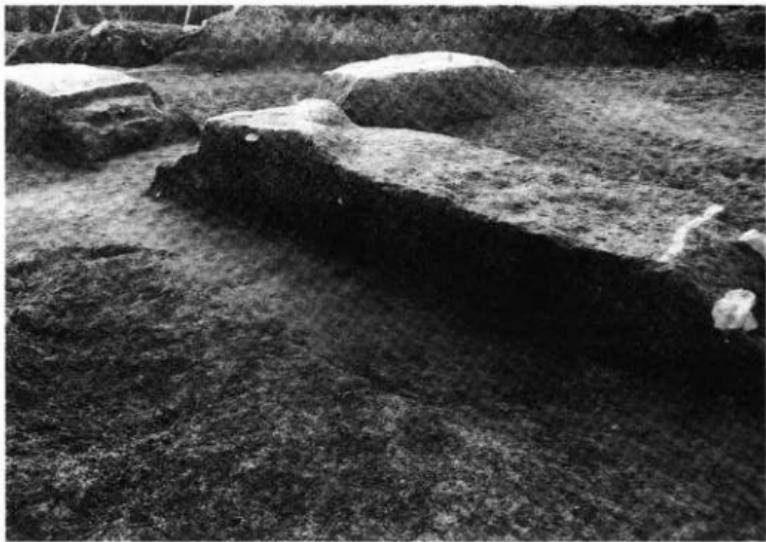


SM1003横穴式石室構築状況（羨門）

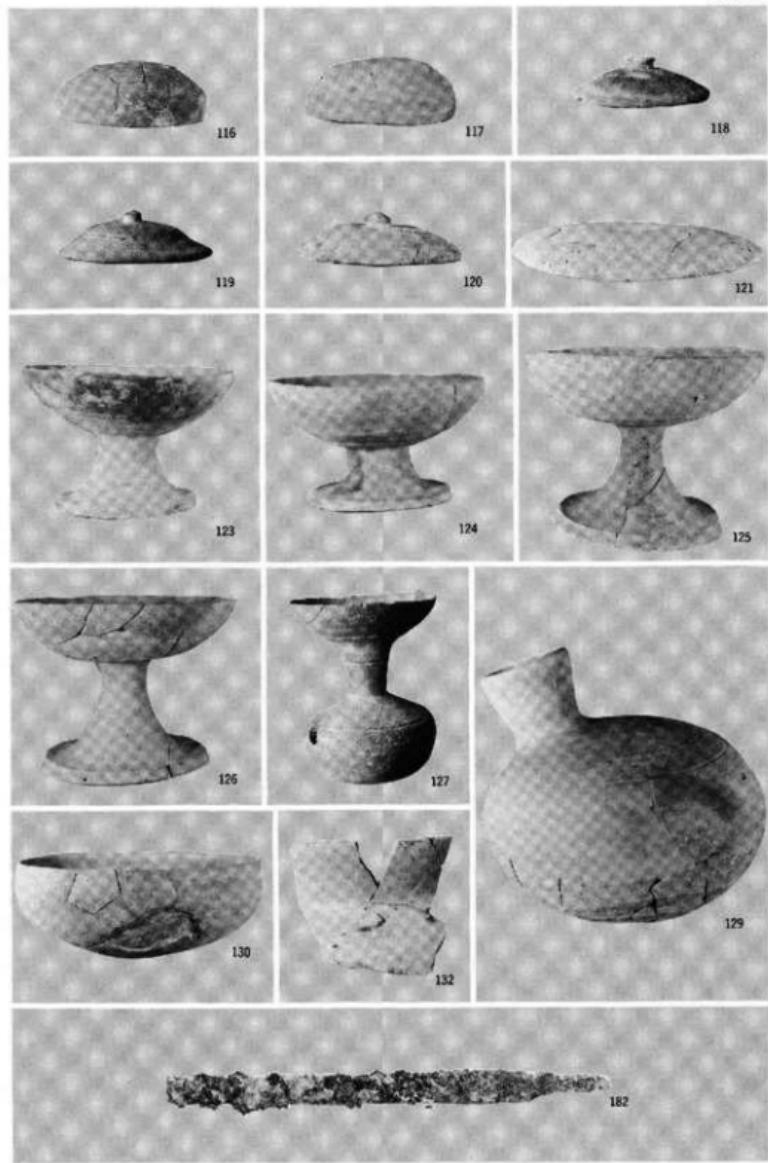
図版25



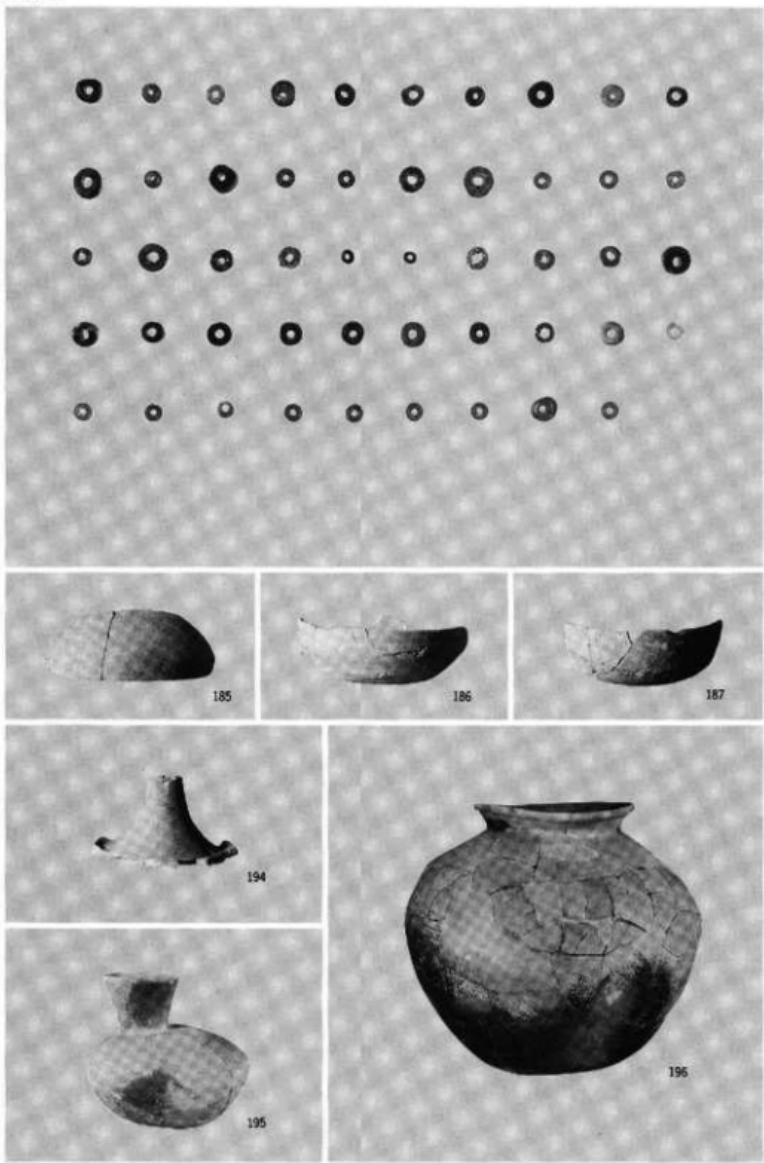
SM1003墳丘内遺物出土状況



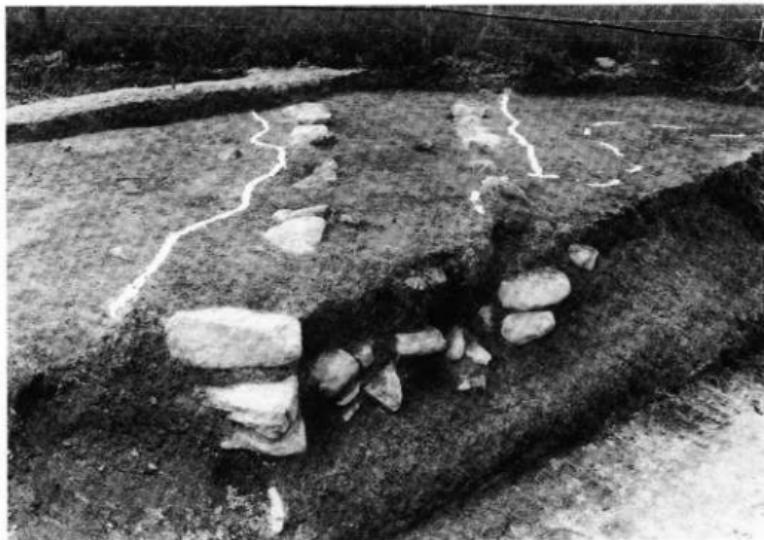
SM1003墳丘断ち割り状況



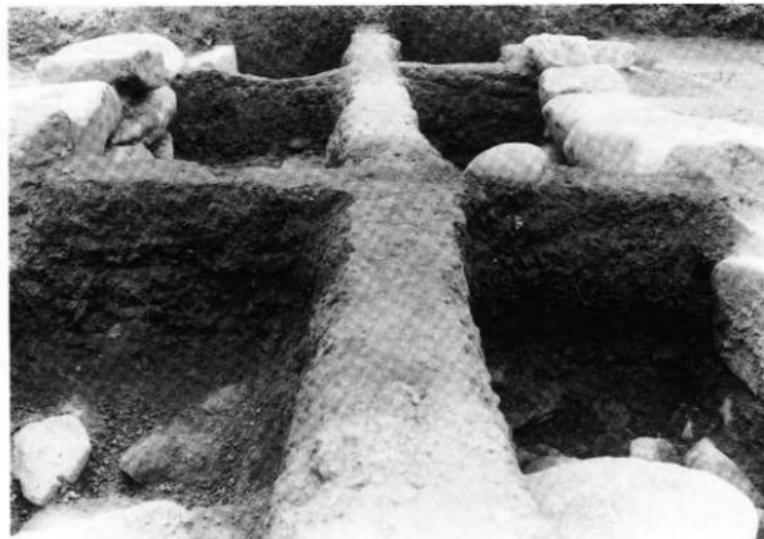
SM1003出土遺物 (1)



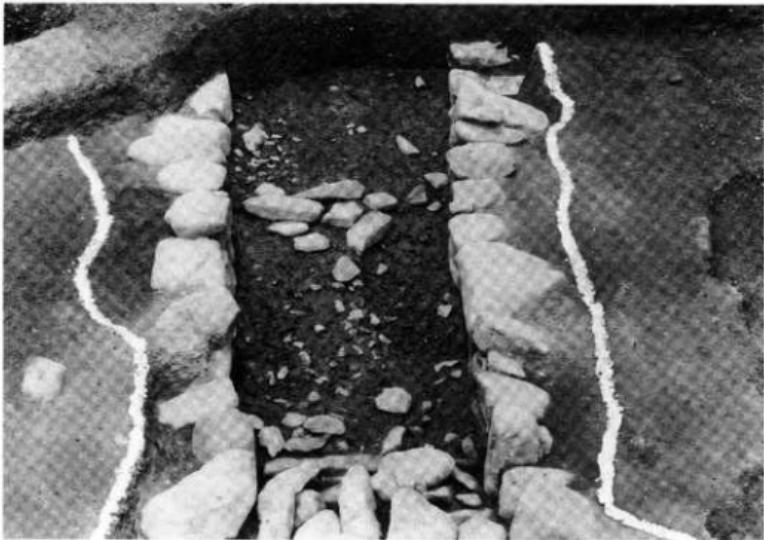
SM1003出土遗物 (2)



SM1004横穴式石室検出状況



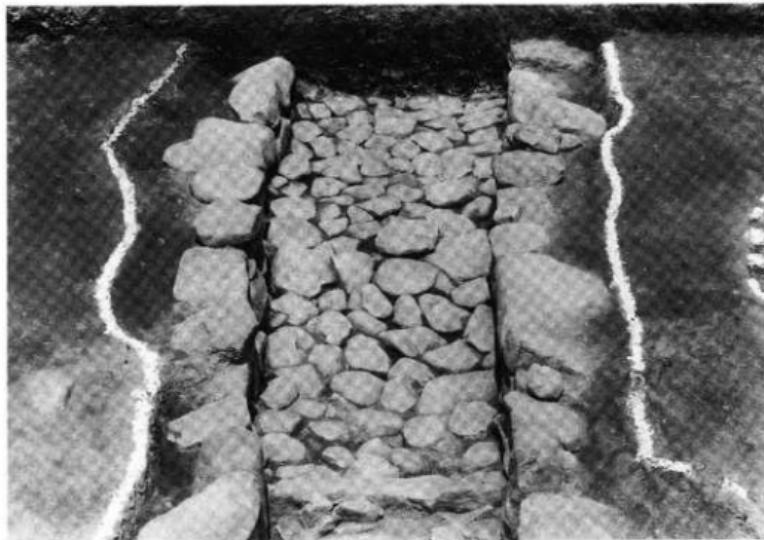
SM1004横穴式石室掘り下げる状況



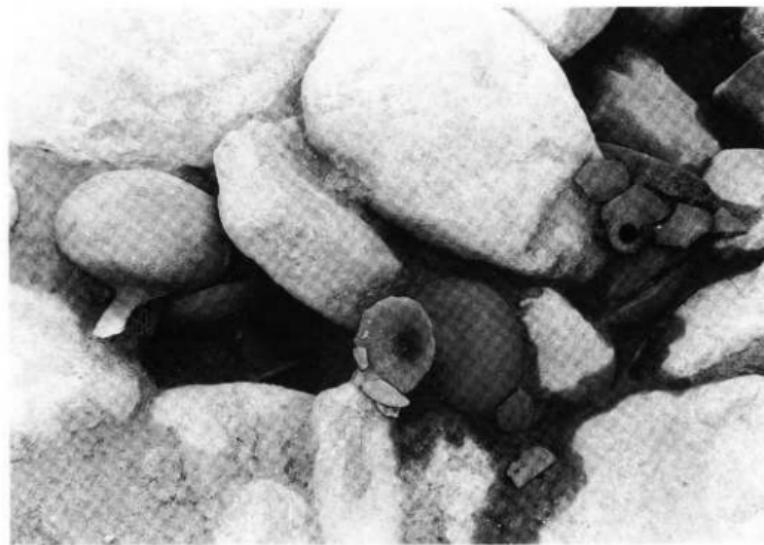
SM1004第二次床面検出状況



SM1004第二次床面人骨出土状況



SM1004第一次床面檢出狀況



SM1004閉塞石內遺物出土狀況